

—ものづくり・商い・もてなしのまち京都—

(1) 伝統産業を支える地域

京都の産業は、日本の政治・経済・文化の中心地として栄え、情報や物資が交流する中で、町衆が自由に活動することにより生まれ、京都の四季の移ろい豊かで風光明媚な自然環境の中で培ってきた美意識によって育まれてきた。

今日、そのうちの多くは伝統産業として受け継がれている。また、伝統産業による製品のうち17品目は、伝統的工芸品として国の指定を受けたものであり、その数は全国で一番多い。京都は、多くの伝統工芸品を作り出す力が集積することによって、更に新しい伝統工芸品を生み出す力を持つ都市といえる。

また、伝統産業からスタートして、そのコア技術や培われた美意識を活用して先端産業に生まれ変わり、時代の先端を走る企業の出現にも枚挙にいとまがない。こうした先端産業は、直接、海外とビジネス展開を行い、京都から本社を東京に移すことがない。これは大阪生まれの大企業の行動パターンとは大きく異なる。

この項では、今なお発展を続けている京都の伝統産業の原点であり基盤であり、発展の支えとなっている地域の歴史的風致を示していく。

ア 具体事例

(7) 五条坂・やきもののまち

現在五条坂というと、東大路から清水坂へ至る部分の名称としてよく使用されるが、かつては、現在の五条通の大和大路から清水坂との交差点あたりを示していた。清水寺から現在の東大路通に下っていく通りが清水坂と呼ばれ、清水坂から分かれ、五条通へと下っていく通りは五条坂と呼ばれ、いずれも清水寺参詣道であった。清水寺への参詣客が、五条坂や五条坂に平行した形で清水寺に続く茶わん坂に軒を連ねた京焼・清水焼の店舗は、この町の清水焼の歴史をしのばせる。

五条坂、茶わん坂はともに清水山の西側の麓に位置し、清水寺から東山五条に

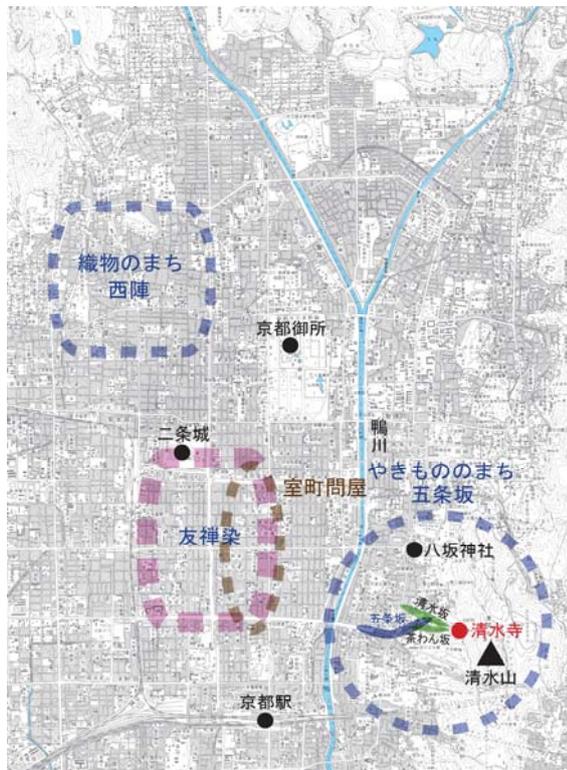


図2-35 伝統産業を支える地域

至るまでは急な傾斜地となっている。また、東山五条から五条通沿い、五条大橋に至る間は緩い傾斜を持っている。清水焼の登り窯は、これらの傾斜を利用してつくられている。現在、五条坂地区には、いくつかの登り窯が現存している。このうち、河井寛次郎記念館（旧河井寛次郎邸）登り窯（国登録有形文化財）や旧藤平陶芸登り窯などは、保存が図られている。

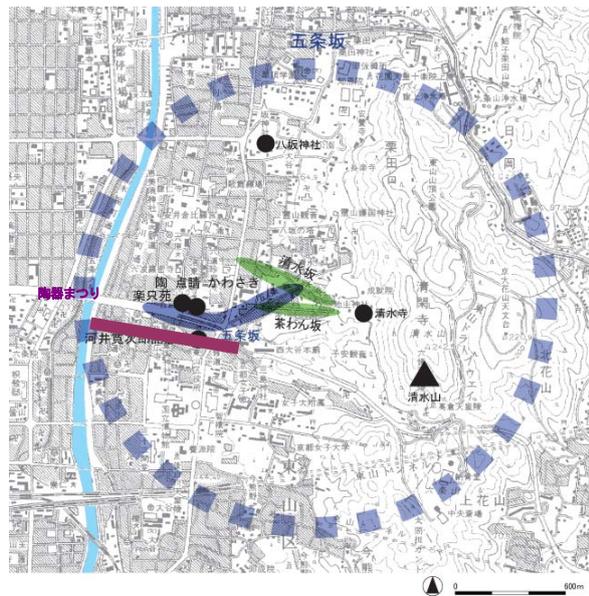


図2-36 五条坂・やきものまち

清水焼は慶長年間(1596～1615)の開窯とされ、江戸時代中期には五条坂もまた、清水焼の生産地となっていたとされている。尾形乾山(1663～1743)が記した「陶工必用」(元文2年(1737))には、「遊行土 洛東松原通(現東山五条)ノ野辺ニアリ」との記述があり、清水焼が洛東の陶土を主原料としたことはほぼ確実であり、よい土がとれたという地質的条件もここで製陶業が栄えた条件であった。また、「都名所図会」安永9年(1780)発行に五条坂付近とみられる焼物商の様子が描かれている。

幕末から明治初期の段階で五条坂には38軒のやきもの屋が立ち並び、「本朝陶器攷登」は、10の登窯があったと記されている。明治29年(1896)には市立陶磁器試験場が五条坂に創立された。近代には、五条坂地区に多数の登り窯が築かれ、五条通沿いを中心に窯元や販売店が並び、やきものまちとして隆盛した。現在五条坂の風物詩ともなっている陶器まつりは、大正8年(1919)に始まったものである。また、五条坂には、陶芸家・河井寛次郎が居を構え、陶芸を行うなど、民藝運動の主要な舞台ともなった。その旧宅である河井寛次郎記念館は、現在、五条坂の名所のひとつとなっている。

その後、五条通りが拡幅され、登り窯は使用されなくなり、陶磁器の生産機能は、清水焼団地(山科区)などに移り、五条坂は陶磁器販売のまちへと変化していった。

現在、五条坂周辺には清水焼の窯元、陶磁器販売店が集まり、登り窯、陶芸家の旧居などが残っていることにより、清水焼の産地としての歴史を偲ばせる。

この中で、昭和40年に開業し京焼・清水焼の販売を行っている楽只苑(市指定歴史的意匠建造物)は、本家初代入江道仙が寛政年間にこの地で陶磁器の製造をはじめ、昭和18年から有限会社道仙化学製陶所の社長宅兼事務所として使用

されていた京町家で、五条通北側に位置する化学陶器の窯元であった。入江家の登り窯は部分的に昔の形を残し、また隣家には現存する登り窯もあることから、この地域の製陶の歴史がうかがえる。主屋と窯の間には、現在でも職人長屋が残っており、主屋のトンネル路地の奥から陶器職人や桐箱職人たちの営みと生活を漂わせている。また、京町家の風情ある歴史的なたたずまいをもつ店内では、京焼特有の繊細な色絵を使った端正な京焼の作品が、訪れた多くの人々を魅了し、やきものの文化的香りを体感させている。

他にも、明治末期に建てられたとされている京町家で、四代にわたり清水焼製造・販売を営んできた陶点晴かわさきでは、日用品などの親しみやすいやきものが店内に所狭しと並べられているなど、それぞれの販売店が個性を持ちながら、一体となって町並みを形成している。



写真2-61 楽只苑



写真2-62 陶点晴かわさき

毎年8月7日～10日に開催される陶器まつりは、大正初期に精霊迎えに訪れる参詣客を対象に夜店を出したのに始まるとされ、五条通沿いには数百の出店が並び、所狭しと色鮮やかな器が並べられる。登り窯からやきものを焼く煙が漂うような光景は見るのがなくなったが、登り窯が存在したことを偲ばせる坂道において、店の主人が、やきもの店に並んだ器を手取る清水寺の参詣客と会話を交わす姿がそこここにある、今なおやきものまちは健在であり、活気にあふれている。



写真2-63, 64 五条坂陶器まつり大器市 提供 五条坂陶器祭運営協議会

これらの日常の営みや、陶器まつりの際の営みが、往時を思わせる登り窯などの歴史遺産や五条坂の歴史的な町並みと一体となって、活気ある伝統産業の技術の香りを感じさせている。

(イ) 西陣・織物のまち

西陣織は、京都を代表する伝統産業である。その生産は多くの工程に分業され、それぞれに高度な専門技能が必要とされる。西陣では、今なおこれらの職人が伝統を守りながら、織物の生産を行っている。

西陣とは正式な地名ではなく、西陣織の関係者が集中する地域の総称とによってよい。おおむね、東を堀川通、北を北大路通、西を西大路通、南を中立売通に囲まれた範囲を呼ぶのが通例である。

西陣の地における機業の歴史は、その名の起こりよりはるかに古く、平安時代に律令制の官司のひとつであった織部司の職工たちが機業に従事するためにこの地に住んだことに始まる。平安時代の後期に律令制の諸官庁の崩壊以後も職工たちはそれまでの官機に代わって私機の生産を続け、機業地を形成していった。

室町時代、応仁の乱によってこの地も荒廃した。戦火がおさまると地方に離散していた職工が再び戻り、西軍・山名宗全の陣が置かれた堀川の西あたりを中心に集住した。西陣の名の由来はこれによっている。

江戸時代後期になると、西陣は享保15年(1730)の「西陣焼け」や、天明8年(1788)の「天明の大火」、加えて、桐生、丹後などのいわゆる「田舎絹」の台頭や質素儉約令によって沈滞し、明治を迎えた。

こうした沈滞を打開したのが明治6年(1873)にフランスから輸入されたジャカード機(力織機)による技術革新であった。ジャカード機は明治中頃から普及するマニファクチュアによって広がり、徐々に中小の織元や自営業者にも広がっていった。現在、最初期のジャカード機は、京都市指定・登録有形文化財として財団法人西陣織物館などに所蔵されている。

西陣地区の町割の特徴としては、通りと通りの間を辻子と呼ばれる路地がつなぐ形態がみられる。平安京の条坊制に由来する京都洛中の方形街区は、秀吉の都市改造により南北の通りがつくられることで短冊状に変貌し、一方で既に街区内部の開発が進んでいた鉾町など下京中心部では、この開発がなされなかったことが知られている。これに対して西陣地区は最初から突き抜けを通す都市改造の対象とならず、以降、辻子と呼ばれる細い路地によって方形街区の内部が開発されていった。

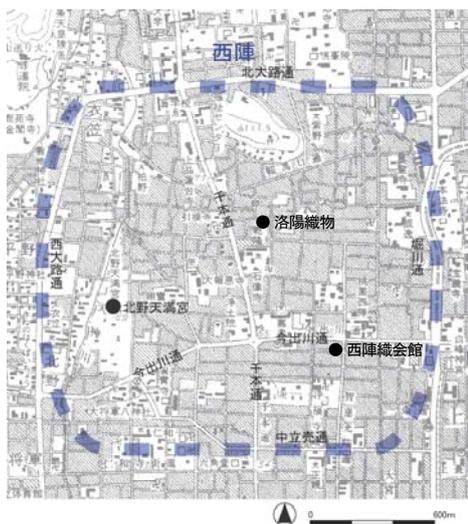


写真2-65 西陣の町並み

図2-37 西陣

西陣の町家の多くは工住併用住宅である。西陣の工業地域としての特徴は、その主な生産業である機業が高度に分業化されており、その各工程を担当する機業者が集住している点であり、地域が一つの工場を形成しているともいえる。その各工程を結ぶ存在が地場問屋といわれる存在であり、資金を調達して、糸の工面に始まり、各工程の労賃を確保し、最後に製品を室町の間屋に納めていた。織物生産の工程のうち、最も空間形態に大きな影響を与えているのが織りの工程であり、西陣では織りの仕事場を持つ町家の建て方を「織屋建て」と呼んでいる。この西陣における町家は『京町家の暮らし』の項で述べているように、その起源は平安時代中期ごろとされているが、今日見られる京町家が成立したのは江戸時代中期とされている。この地域の特徴である「織屋建て」は、通りニワ形式の平面を基本とするが、奥の間を吹き抜けにして織り場の空間を確保しており、室町辺りの京町家とは大きく異なる。

現在でも試験織りや高級な織物などは、京都で生産を続けている。

例えば、この地域で生産を続けている織元の一つである洛陽織物は、明治31年（1898）の創業以来100年余りの歴史を持ち、その社屋は慶応3年（1867）創建と伝えられる京町家（市指定歴史的意匠建造物）である。現在でも、その奥の工房で手織を織り続けている。

西陣の町を歩くと伝統的な町家からしばしば、「ガッチャン、ガッチャン」と機音が聴こえ、色鮮やかな西陣織の図柄が面前に浮かび上がる。これらの営みが、「織屋建て」の京町家を中心とした歴史的な町並みと一体となって、伝統産業が今もなお息づいていることを感じさせる。



写真2-66 洛陽織物



写真2-67 中での作業の様子

(ウ) 友禅染めのまち

京友禅は西陣織と肩を並べる、京都の中心的な伝統産業である。

かつては、染色産業は良質の水を求めて堀川などを中心に分布していたが、今日では、西陣織ほどには、産地としての集積が見られない。これは、比較的広い敷地を必要とする工程があることなどが理由として考えられる。

ただ、後に示す通り、かつては「水洗い」の工程が堀川等の川で行われていたこと、また室町問屋との取引上の立地条件から、今日でも堀川通り左右の、二条から五条辺りまでの都心部に多数の染加工業者が集中している。

京友禅の歴史は、町人文化の栄えた元禄時代に開花した。当時、京都知恩院門前に住んでいた宮崎友禅斎という扇絵師が描く扇絵が大評判となり、着物の染め模様としても注文されたことに始まるとされている。貞享5年(1688)には、「都今様友禅ひいながた」の雛型本(商品などの縮小図を収録した冊子)が発行されている。江戸時代の友禅染めは、現在の「手描き友禅」とほぼ同じ技法で作られていたため、生産量に限界があり、限られた地域・人々への供給にとどまっていた。明治時代に入り、文明開化とともに化学染料が染色に導入されるようになると、化学染料による色糊を使用し、型紙によって友禅模様を写し取る写し友禅染めが発明され、「型友禅」として発展を遂げた。これにより、大量生産が可能になったため、友禅きものは一気に普及した。さらにその後、明治期の型染めの広幅への応用やローラ捺染の導入、戦後の欧米からのオートスクリーン・走行式捺染等の相次ぐ導入が行われるなど、京染技術は多面的な発展を遂げている。

京友禅産地の最大の特徴は、加工方法別・生産タイプ別に、多様な染技法別に生産工程が細分化され、各種の専門業者が存在する社会的分業体制にある。たとえば「手描き友禅」では、プロデューサー機能を担当する染匠の下に精錬業・図案業・浸染業・引染業、下絵業・糊置業・挿し彩色業・蒸し水洗業・絞加工業・金彩業・刺繍業・染色補正業などが存在している。これら十数にもわたる各工程においてそれぞれ専門化され、相互に緊密な分業と協働の関係を構築している。この

分業体制が、地域のつながりに影響を与えており、反物はそれぞれの職人の家を次々と移動することで仕上がる。かつて通りには、反物や着物、刷毛や染料などの材料を運ぶ自転車や自動車がひっきりなしに通っていた。現在でも、この境界を歩いていると、平安時代中期ごろが起源とされ、江戸時代中期に成立したとされている伝統的な京町家に「染」といった文字のある看板を見つけることができる。そして、車や自転車に反物を積んだり、脇に抱えて通り過ぎる人々を、見かけることができる。

京都都心部に位置する本能学区は、良質な地下水を活用し、京染の生産地として発展してきた地域の一つである。現在でも京染に関わる職人が多く住む地域として“染めのまち本能”をキャッチフレーズに、地域の資源である「染め」の文化・技術を現代の魅力として活かしながら、まちづくりを展開している。毎年、春と秋には本能祭りを開催し、多くの染めの関係者の京町家の軒先に伝統色に染めた暖簾を吊るし、型染め、手描き友禅、金箔押し、機械染め、家紋などの様々な工程を見学するコースを設け、地域住民も改めて学区内の染色産業の懐の深さを実感する。日常的にも、自分だけの着物をプロデュースし、自分の好きな反物を好きな色柄に染めて、さらには好みのデザインに縫製し、廉価で提供することにも取り組み、染めの町本能のまちづくりを盛り上げている。

この住民の多くは、小学校の先輩、後輩であり、同業者であり、時代祭の担い手である平安講社のメンバーでもあり、さらには、京町家に住んでいることから、お互いの住まいの状況も良く分かっているため、ことさらコミュニティ活動と気負う必要はない。



図2-38 友禅



写真2-68 本能での取組の様子



写真2-68-1 本能学区の事例（金彩荒木）



写真2-68-2 中での作業の様子

「京友禅は水の芸術である」といわれている。友禅染めは、染めが終わったあと蒸して発色・定着させ、その後水洗いを行うが、洗う水の質によって仕上がりが大きく左右されてしまう。例えば水に鉄分が含まれていると、生地がその鉄分を吸って赤みを帯びてしまうのである。かつて鴨川や堀川で行われていたこの水洗いを「友禅流し」と呼び、古都の風物詩となっていたが、昭和40年代には河川を汚染すると言う理由から、行われなくなった。現在では、屋内の人工川に澄んだ地下水を汲み上げて水洗いを行うところが多く、伝統ある京友禅の美しさを守り続けている。

なお、「友禅流し」を再現しようと、毎年8月に、鴨川の河川敷において洗いを済ませた反物を使ったデモンストレーションが行われ、伝統行事の継承として定着している。

このように、京町家などで行われている京友禅の営みが、京町家を中心とした歴史的な町並みと一体となって伝統の技が今もなお息づいていることを感じさせ、「友禅流し」においては、美しい緑の山々を背景に色鮮やかに彩られた川の風景は、周囲の町並みと一体となって、かつての営みを今に伝え、伝統産業の中心地であること感じさせる。

(イ) 室町問屋

京都繊維卸の中核をなす室町問屋は、京染産地の卸機能を担うとともに、西陣、丹後も含めた府内繊維卸の総括機能も持ち、また何よりも和装品の全国最大の集散地として、全国和装品流通の総括機能を持っている。

京都の織物問屋の発祥は、平安遷都時に国家の直営により設けられた市（東市、西市）にまで遡ると言われている。室町問屋街が発生したのは、延宝元年（1673）三井家が店を開き、京織物などの仕入れを行った頃からと見られている。

この地が近世的な問屋街へと発展したのは、西陣織と京染の需要が飛躍的に拡大した江戸中期、元禄・享保年間と考えられる。この時代に高級絹織物を中心として各産地から集荷し、諸国に販売する全国市場としての基礎が確立された。江戸時代の京都の名所案内である「京羽二重」からも、室町通沿いに呉服関係の店が集まっていた様子が分かる。

室町問屋は現在でも呉服問屋として知られている。室町問屋とは言うものの、室町通だけでなく、その周辺に渡って分布している。現在でも、平安時代中期ごろが起源とされ、江戸時代中期に成立したとされている伝統的な京町家において問屋業が営まれているところもある。その町並みは、普段は京町家をはじめとする静かな町並みであるが、祇園祭の宵山の時期には、その情景は一転する。「京都の祭礼」でも示したように、室町問屋は祇園祭の山鉾町に立地しており、祇園祭の懸装品の充実には、その歴史を見ることができる。また、室町問屋の中には、「京都の祭礼」でも示した屏風祭を行う商家もあり、さらに、浴衣をはじめとする和装品を安価で販売する店もあちこちに見られる。山鉾の懸装品や屏風祭り、そして色とりどりの浴衣や帯・小物が並べられている様は、宵山において室町問屋の繊維問屋街としての歴史を感じさせる。

イ 伝統産業を支える地域に見る歴史的風致

京都には国指定の伝統的工芸品の17品目をはじめとして、伝統的な産業が多数存在する。ここで示した以外にも、先に示した本願寺門前の仏具、後に示す伏見の酒など、範囲は確定しないまでもそれぞれ地域性があり、それぞれに歴史の深さを感じさせる。

また、豆腐などのように京都の良質の地下水により、市内各所に広く分布している産業もあり、市全体の中で営みの広がりを見ることができる。

このように、京都では京町家をはじめとする歴史的建造物の中で、今もなお伝統産業の営みが続けられており、これらがその町並みなどと一体となって京都特有の産業の歴史の奥深さを感じさせる。

そして、それらが生産工程において互いに関係し合い、また能などの伝統芸能や茶会などでは、それらの伝統工芸品が道具類や装備品として一つの場集まることで影響しあい、市内各所でそれぞれの産業が関連し合いながら京都特有の産業を生み出している。これが、京都の伝統産業の最大の特徴である。

(2) 歴史を刻んだ市場・市

京都には、古くから栄えてきた市があり、現在においても人々の暮らしに溶け込んでいる。

京都の商店街の中には、錦小路市場のように、近世以前の市場に由来するものが見られる。それが形を変えながらも、現在の都市景観にその歴史を刻んでいる事例として重要な地域といえる。また、決まった日に立つ市として、京都では弘法さんや天神さんが広く知られている。

この項では、上記のような歴史の中で形成されてきた市場や市などに見る歴史的風致を示していく。

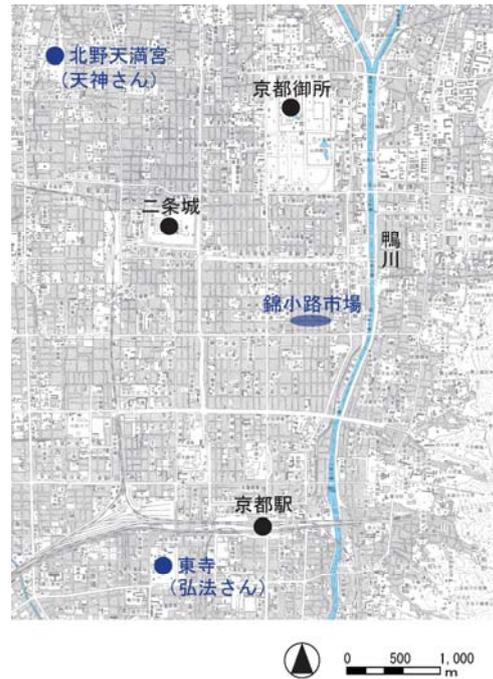


図2-39 歴史を刻んだ市場・市

ア 具体事例

(7) 錦小路市場

暮れの錦は大変な混雑である。普段は近所で買い物を行う人々も、暮れになると正月の支度のために錦を訪れる。狭い道に多くの買い物客が訪れるため、かいくぐるように歩かなければならない。店のご主人や店員の大きな掛け声と、雑踏のざわめきが、市場の雰囲気を一層盛り上げる。

錦小路通は平安京が造営された際から存在する通りで、建設当初、道幅は12メートルあったが、その後、時代を経るにしたがって幅員が狭くなっていった。

魚鳥の市場として開設された年月は明らかではないが、この地が人口の密集した中枢部にあたることと、清冷な地下水が湧き出るので魚鳥の貯蔵等に便利であり、御所への魚鳥の納入の経路であったため、自然にこの地に市場が発生したと言われる。

本格的な魚市場となったのは、江戸時代初頭の元和年間(1615～1623)、幕府より魚問屋の称号が許されたことが契機となった。17世紀半ばには、上の店、錦の店、六条の店(問屋町)の三ヶ所が最も繁栄を極め、これを三店魚問屋と称した。特に錦に店をもつ商人は、公儀から鑑札を得ることにより独占的な営業をしたという。明和7年(1770)に錦小路高倉に青物市場が奉行所より認められ、その後魚問屋付近に野菜の市場が開かれた。

現在の錦市場商店街は、通りが約3mと狭く、店も多くが「うなぎの寝床」と称される間口が狭く奥行きが深い形態となっており、京町家として現存している

ところも多い。敷地割や建築構成は、近世以前の形態が残存し、町並みのスケール感を残している。また、商品を通りにはみ出して並べ、店により扱う商品の重複を避けたり陳列に気を使うなど、店と通りの空間を一体としていて、錦市場商店街として大きな一つの空間としてのイメージを与えている。同時に、各店の個性が強く印象づけられる。このように、歴史的な町並みの構成を残すとともに、商業形態は変化しながらも、市場を継承した小売業が継続されている。

錦市場のアーケードの中に、店の間をめいばいに開いた京町家の店舗が連なり、そこには京野菜や魚、漬物といった商品が所狭しと並べられており、他の店に負けじと発する呼び込みの声やざわめきと市場特有のにおいが相まって、行き交う買い物客に古くから続く、活気あふれる京都の台所の風情を感じさせている。

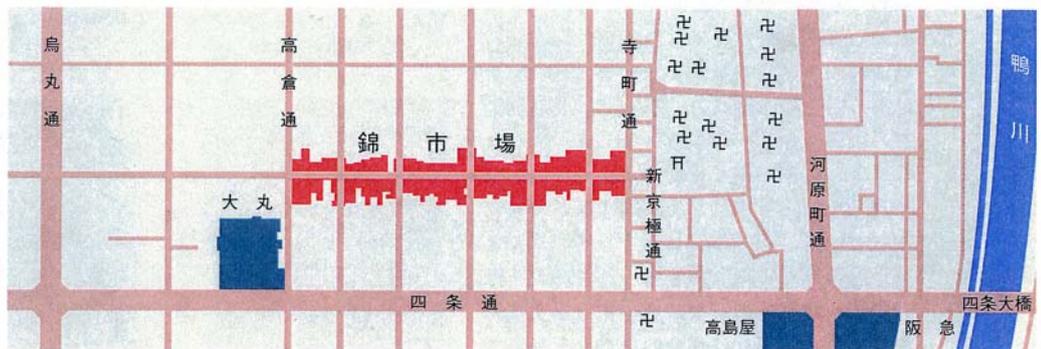


図2-40-1 錦市場の位置

出典 「京都歴史アトラス」1994年、足利健亮 編、中央公論新社

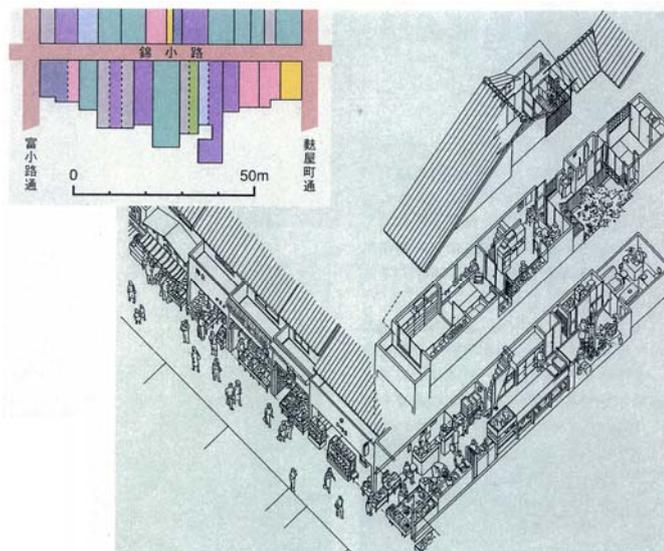


図2-40-2 錦の町並と町家

出典 「京都歴史アトラス」1994年、足利健亮 編、中央公論新社



写真2-69 錦小路市場

(イ) 縁日市

縁日というのは「有縁の日」「結縁の日」の意味で、神仏の降誕・示現・誓願などにちなんで、霊験が顕著とされる日である。寺社ではこぞってこの日を宣伝し、

大衆の参詣を促していた。寺社参詣が都市住民の遊山となりつつあった江戸時代の京都では、縁日には、その寺社の境内・参道あるいは周辺付近に、必ず露店の「縁日市」が立った。この縁日のうち、京都市には、弘法さん・天神さんといった、広く市民に親しまれ、多くの参拝者で賑わう、毎月の縁日市がある。

a 弘法さん

「弘法さん」は、弘法大師空海の月命日の21日に、東寺（教王護国寺）で行われる弘法市である。弘法市の起源は明らかではないが、中世に「一服一銭」で茶を商う商人が出るようになり、江戸時代には植木屋などその他の商人も出るようになったことが始まりであるとも言われている。寛政11年（1799）に発行された「都林泉名勝図会」には、空海の命日に行われる法要、御影供の時の参道の様子が描かれており、植木屋や食べ物の屋台の様子などが見受けられる。

この市が開かれる東寺は、東寺真言宗の総本山である。延暦13年（794）の平安遷都に際して、仏教勢力の排除を意図し、平安京には国家鎮護のため羅城門の東西に、東寺、西寺の二つの官寺のみが造営された。以降、西寺が衰退していったのに対して、東寺は勢力を維持しつづけた。嵯峨天皇により空海（弘法大師）に下賜され密教寺院となった東寺は、鎮護国家・王城守護の寺院にとどまらず、密教の隆盛によって貴族の信仰を集めた。空海没後、弘法大師信仰が盛んになり、庶民の信仰によって栄えていく。このため、鎌倉時代以降、大宮七条に稻荷社御旅所があったことなども影響し、次第に東寺門前には、門前町が形成された。

「弘法さん」の当日、の東寺では、御影供（みえく）が営まれるが、境内や寺の周りには多くの縁起物、日

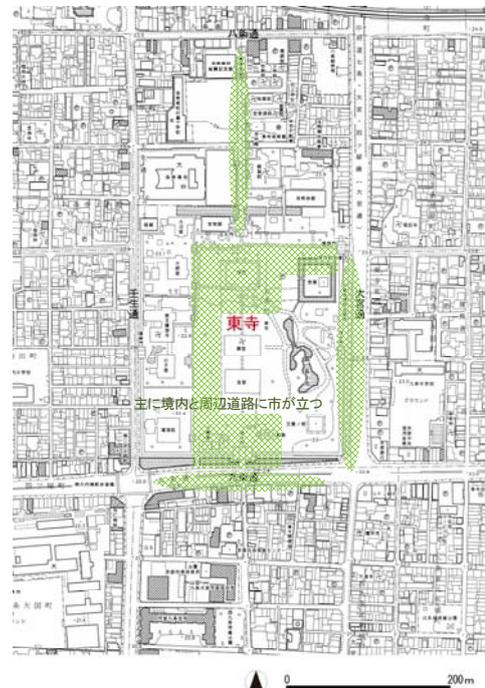


図2-41 弘法さん



写真2-70 弘法さん

用雑貨品から植木、骨董品まで、広い境内や周辺の通りに所狭しとあらゆる商品の露店が多数軒を並べ、参詣客と活気あるやりとりが繰り広げられる。

なかでも、1月の初弘法と12月の終い弘法は特に多数の参詣客で賑わい、威勢のよい商人の呼び声が、雑踏の中に響き渡る。

築地塀越しに見える堂舎や五重塔の風景を背景に繰り広げられ、縁日の活気とざわめきの中、買い物客等は時を越えて歴史ある風情を感じさせる。

b 天神さん

天神さんは、平安時代に学者・政治家として活躍した菅原道真をお祀りする北野天満宮（国宝）において、毎月25日、菅原道真公の月命日に行われる市である。初天神の北野詣では近世の記録にもあり、「弘法さん」と同様、寺社参詣が都市住民の遊山となりつつあった近世には、人々の生活の身近な月市として親しまれていたと考えられる。

「北野の天神さん」と親しまれている北野天満宮は、天曆元年（947）に創建され、中世以降、次第に文教の祖神とも仰がれるようになり、特に学問の神様としての信仰が篤く、受験シーズンには市内だけでなく遠方からも御利益を求める人で賑わう。

縁日が開かれる当日は弘法さんの縁日と同様、参道や御前通近辺には多くの露店が立ち並び、終日活気にあふれており、今出川通りからもその活気を感じられる。天神さんは骨董品と古着の露店が多く集まることで有名であり、なかでも、1月の初天神と12月の終い天神は特に多数の参詣客で賑わいをみせる。



図2-42 天神さん



写真2-71 天神さん

弘法さん、天神さんの両縁日が張り合うことから、「弘法さんの日が雨なら天神さんの日は晴れる」などといわれている。

立ち並ぶ多くの露天の活気が、北野天満宮といった歴史的に価値の高い建造物を中心とする周辺の北野界わいの歴史的な町家群等の町並みに溢れ出している。

イ 歴史を刻んだ市場・市に見る歴史的風致

このように、京都の長い歴史の中で形成されてきた市場や市は、今もなお活気を保ち続けており、客と店員が声を張り上げながら会話する姿や、独特の香りは、今も昔も変わらない市の歴史と力強さを感じる。そして、その活気ある様子が周辺からも見て取れ、人々の心を浮き立たせ、さらに人々を市の中へと誘い込む。また、これらの歴史ある市場や市では、扱われているものも伝統や歴史を感じさせるものが多く、一層風情を引き立てている。

これらの市場・市の営みは、中心となっている寺社や歴史的な町並みとともに、訪れる人々に、歴史とともに積み重ねられてきた市場や市の歴史を感じさせてくれる。

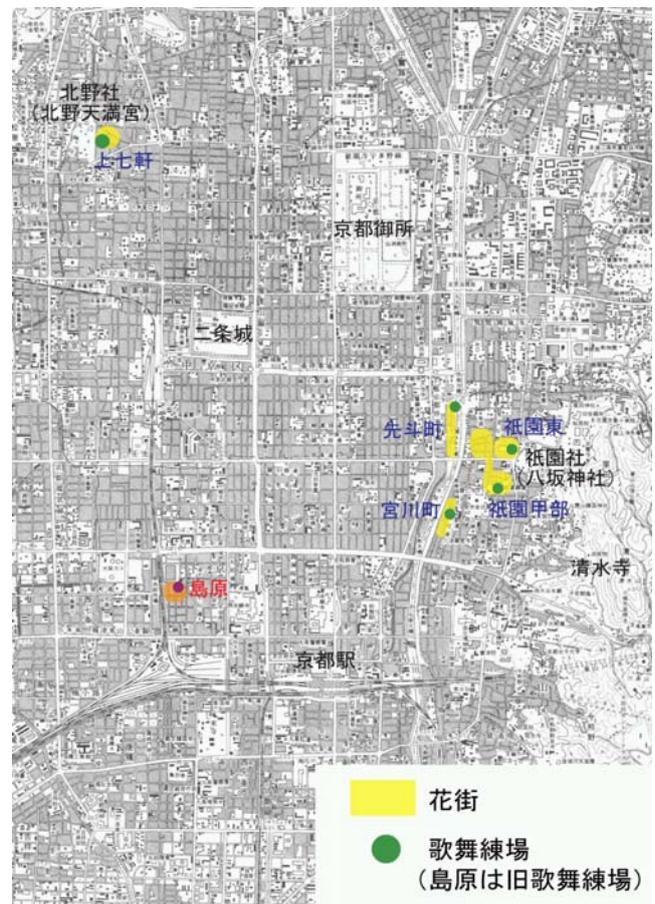
(3) もてなしのまち・花街

京都には、上七軒、祇園甲部、祇園東、宮川町、先斗町の五つの花街がある。ここでは、京都独自の洗練されたもてなしの文化が受け継がれ、息づいている。芸妓や舞妓の立ち居振る舞い、洗練された和装姿、それらは全てもてなしの文化が形となって現れたものである。

この項では、まず京都の花街の概要を説明したのち、花街の「をどり」などを題材に、もてなしのまち花街の歴史的風致を示していく。

ア 京都の花街

京都の花街の多くは、近世初頭頃から、北野社や祇園社、清水寺といった地域の神社仏閣へ参詣す



る人々に茶をもてなす水茶屋が起源となって発祥したものである。現在は五花街となっているが、平成8年までは島原にもお茶屋組合や歌舞練場があった。

花街には、芸妓や舞妓が生活する置屋（京都では屋形と呼ばれる。）と、座敷で客人に舞や音曲を披露し、酒席の空間を提供する「お茶屋」があり、屋形がお茶屋を兼ねているところもある。芸妓や舞妓は、屋形で生活し、芸事等の稽古は、各花街の学校や検番などで行なっている。

このような学校は、芸妓や舞妓が花街の外で働こうとした際に困らないよう手に職をつけるため、裁縫、機織り等を教える目的で、明治時代初期に設立されたのが前身である。当時は、芸妓や舞妓だけでなく、その花街に暮らす女性一般の教育も広く担っていた。現在、祇園甲部では「八坂女紅場学園」、先斗町は「鴨川学園」、宮川町は「東山女子学園」があり、舞踊、邦楽、華道、茶道等を教えている。上七軒には、これに相当するものがなく「検番」に拠っている。また、祇園東には「美麿女紅場」があったが大正年間に無くなり、現在はお茶屋組合で稽古を行なうことで、花街の伝統を継承している。

イ 具体事例

(7) 上七軒

五つの花街の中で最も古い花街が「上七軒」で、15世紀中頃北野天満宮（本殿は国宝）が一部焼失し、修理工事の際に残った材料の払い下げにより出来上がった7軒の茶屋が起源になる。

今も趣のある町並みを残す上七軒の花街を中心に、「上京北野界わい景観整備地区」に指定している地域は、北野天満宮の門前としての特色ある風情を今に留めている。特に、上七軒通りには、茶屋が建ち並び、門前町の賑わいととも花街の伝統文化が継承されており、優雅で落ち着いたある町並みを形成している。

また、このあたりは、天正15年（1587）豊臣秀吉が催した北野大茶会の会場であり、上七軒歌舞練場の北にある西方尼寺の中には、茶会の折に千利休が使ったと伝承されている「利休の井」があり、今もこの寺では釜が掛けられ、茶道の愛好家が訪れている。さらに、梅の名所で知られる北野天満宮で行われる春の「梅花祭」の際には、上七軒の芸舞妓などの奉仕により、野点が開催される。境内の梅と併せた華やかな催しが行われ、北野天満宮の門前町としての歴史的な活動が、今に引き継がれている。

上七軒の歌舞練場は、明治28年（1895）に建設されたもので、その後増改築を重ね、昭和26年に現在の形になった。昭和27年（1952）に上七軒歌舞練場で始められた「北野をどり」は、北野天満宮千五十年大万燈会を記念して開催されたもので、踊りの振り付けは花柳流で、毎年春には多くの客で賑わいを見せている。この時期になると、お茶屋の前には「北野をどり」のちょうちん

が点され、雅な京都らしい独特の風情を醸し出している。



図2-44 上七軒

写真2-72 上七軒の町並み

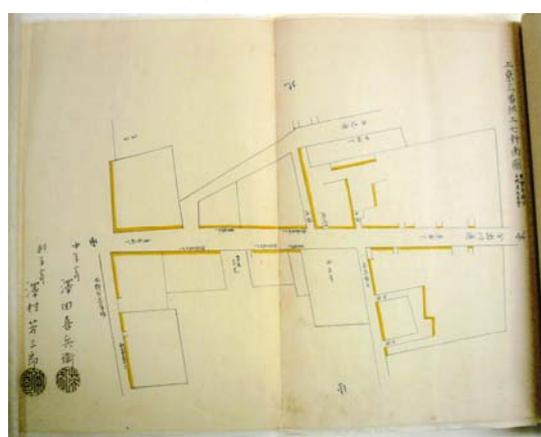
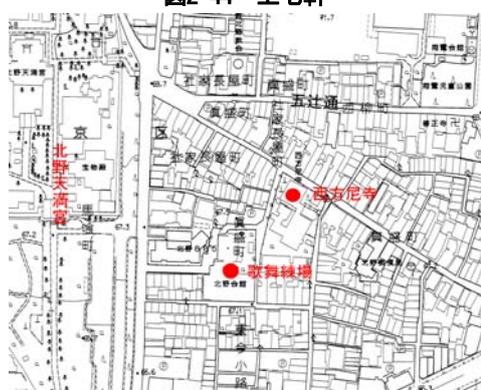


図2-45 上七軒 (拡大図)

京都府立総合資料館 所蔵
図2-46 上七軒 京都府下遊郭由緒 (明治初期)

(イ) 祇園甲部

現在、最も大きな規模を誇る花街が「祇園甲部」で、享保年間（1716－1736）に公許された「祇園新地内六町」を起源としており、一般的には祇園町と呼ばれていた。19世紀初頭には、祇園町のお茶屋は700軒、芸舞妓は3,000名を超えたと言われている。祇園町は明治14年に甲部と乙部に区分され、その甲部が現在祇園甲部と呼ばれるところである。

明治新政府が行った「廃仏毀釈」※政策による上知令により、寺社領が縮小することで京都の町並みは大きく変化し、祇園町にも大きな影響を及ぼした。明治5年（1872）建仁寺の境内の北部が上知され、現在の祇園町南側に編入されたことから、町家が立ち並ぶ花見小路などの町通りが形成された。地域に編入された多くの土地は、女紅場学園の所有となり、お茶屋は土地を借りることになった。現在もお茶屋形式の建物が建ち並ぶ町並みが守られてきた理由の一つとなっている。

「祇園甲部」のうち、「祇園新橋伝統的建造物群保存地区」に指定している祇園新橋や「祇園町南歴史的景観保全修景地区」に指定している付近は、今も良好な

お茶屋形式の町並みが残っている地区であり、千本格子にすだれをたらし茶屋町の町並みを背景に、日中お稽古に向かったり、夕暮れ時にお座敷に向かう芸妓や舞妓を見かけることができる。また、夜になると、格子からもれ出る明かりと通りの街灯の影が織り成す風景がお茶屋の風情を今も醸し出している。

この地域で毎年春に行われる「都をどり」は、明治4年（1871）の東京遷都により繁栄に陰りがさした京都を立て直すため、京都府が岡崎地域に於いて京都博覧会を開催し、翌年、博覧会の余興として行なったのが始まりである。このとき振り付けを依頼されたのが片山春子（三世井上八千代）師で、第1回は祇園新橋のお茶屋「松の屋」で開催された。以後、祇園の舞は「井上流」一筋となり、今も井上八千代宅での舞の公演会には、多くの舞踊愛好家が訪れ、親しまれている。

「都をどり」は、明治6年（1873）建仁寺塔頭清住院を改造した歌舞練場で第2回目が行われたが、大正2年（1913）に現在の歌舞練場（祇園甲部歌舞練場本館他：国登録有形文化財）で開催され、以降、毎年4月の風物詩となっている。この地域では、「都をどり」の時期になると、お茶屋の軒先には「都をどり」のちょうちんが吊るされ、京都の人々に春の到来を感じさせる風景を作り出している。

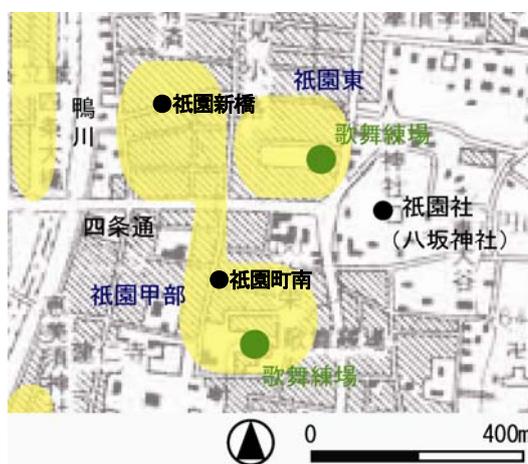


図2-47 祇園甲部, 祇園東



写真2-73 祇園甲部歌舞練場（国登録有形文化財）

提供：祇園甲部組合



写真2-74 都をどりの時期の茶屋

提供：祇園甲部組合

※ 神仏分離令を発端とする明治初期の廃仏の運動

(ウ) 祇園東

「祇園東」の辺りは、禁裏守護の火消し役であった江洲膳所藩の京屋敷があった場所であり、「膳所裏」^{ぜぜうら}とも呼ばれていた地域である。明治3年（1870）にこれらの屋敷が撤去された跡にお茶屋が建ち始め、当時栄えていた祇園町の花街が広がった。明治14年（1888）に京都府知事により祇園町は甲部と乙部に区別され、乙部は昭和24年（1949）に「東新地」と改称され、昭和30年（1955）頃に「祇園東」となった。

「祇園東」では昭和27年（1952）より「祇園をどり」が始められた。踊りの振り付けは藤間流で、昭和33年に建てられた「祇園会館」で、他の花街では春に開催される中、ここでは毎年秋に開催されている。この時期になると、八坂神社の西楼門のはす向かいに位置する祇園会館はちょうちんやぼんぼりで飾られ、また茶屋の前には、祇園をどりのちょうちんが灯される。



写真2-75 祇園をどりの時期の茶屋

提供：祇園東お茶屋組合

(エ) 宮川町

「宮川町」は、出雲の阿国につながる歌舞伎にゆかりのある花街である。

寛文10年（1670）に行われた鴨川の護岸工事により急速に町並みが整い、歌舞伎の若衆の役者たちが酒席に呼ばれる茶屋が多く生まれたことが宮川町の起源となっている。茶屋の許可が宮川町全体に下りたのは、宝暦元年（1751）にまで下る。

宮川町で行われている「京おどり」は、昭和25年（1950）に宮川町歌舞練場で開催されたのが始まりで、途中南座で開催されることもあったが、昭和44年（1969）にこの歌舞練場が建替えられて以降、毎年春に同地で開催されている。踊りの振り付けは、元は上方舞の榎茂都流であったが、30年程



図2-48 宮川町

前から明治期に花柳流から独立した若柳流となった。開催が4月になることから、歌舞練場界隈の疎水端は桜の満開の景色となり、ぼんぼりもしつらえられる。



写真2-76 京おどりの時期の茶屋



写真2-77 京おどりの時期のぼんぼり

(オ) 先斗町

「先斗町」は、宮川町と同じく、寛文10年（1670）、鴨川と高瀬川の間護岸工事により生まれた中の島に、延宝2年（1674）に梅ノ木町に5軒家が形成されたことを契機に、急速に家が建ち並び、町並みが整っていったことが起源になる。正式に芸妓取扱いの許可が下りたのは、文化10年（1813）になってからで、町の名前となっている先斗（ぽんと）の由来は諸説あるが、ポルトガル語のポント（先、先端、点）に由来するとも言われている。

先斗町の「鴨川をどり」も、祇園甲部の「都をどり」と同様に明治5年（1872）の京都博覧会の余興として開催されたのが起源で、当初は裏寺町四条上る大竜寺横の「千代の家」で開催された。踊りの振り付けは尾上流で、現在は昭和2年（1927）に完成した先斗町歌舞練場で毎年春に開催され、「都をどり」と同じくまちが賑わいを見せる。

また、先斗町は鴨川の納涼床が行われる場所としても知られ、現在では毎年5月1日から9月30日の間、先斗町を含めた二条大橋から五条大橋までの鴨川の西岸に、納涼の床組みが建てられる。鴨川の納涼床の歴史は古く、江戸時代に裕福な商人が夏に遠来の客をもてなすのに、四条河原付近の浅瀬や中洲に床几を置いたのが起源といわれている。安永9年（1780）に発行された「都名所図会」には、四条河原の床几などでの納涼の様子が描かれている。当初は床几形式であった床は、数百年に亘る歴史の中で幾多の変遷を経て、現在見られる高床式の姿となり、納涼床では川面を流れる涼風を感じ、せせらぎの水音を聞き、暑い京の夏に涼感を与えてくれる。まさに、人々の暮らしの知恵でもある。

風情のある建物から鴨川に面して床が連なり、その上に舞妓や芸妓の花を時折見つけることができる頃になると、京都の夏を感じる季節になる。



写真2-78 先斗町の町並み



写真2-79 鴨川をどりの時期の先斗町
提供：先斗町お茶屋営業組合



図2-49 先斗町



写真2-80 鴨川の納涼床

ウ もてなしのまち花街に見る歴史的風致

花街では、具体事例に示したようなハレの舞台である「各花街のをどり」や、日常の暮らしが時代を超えて受け継がれ、おもてなしの文化として今もなお花街の歴

史的町並みに生き生きと息づいている。



写真2-81 花街での暮らし1



写真2-82 花街での暮らし2

芸舞妓たちにとって、日頃鍛錬している芸の発表の場である「各花街のをどり」の日には、具体事例に示したとおり、花街の街なみは提灯やぼんぼりで彩られ、華やかな装いとなる。夕暮れともなれば、提灯やぼんぼりに灯りがともされ、時にはそれが川面に映し出され、昼間とは違った風情を醸し出す。

日常の営みにおいても、普段着姿の芸妓や舞妓がお稽古や髪結いさんに向かう姿や着飾った芸舞妓がお座敷に向かうあでやかな姿などを、花街の町並みの中で見ることもあり、花街の独特の風情が漂う。

また、花街の日常は様々な業種の人々に支えられている。例えば、お茶屋が酒席に出す料理は、近くの仕出し屋から取り寄せるシステムとなっており、仕出屋の配達時刻になると料理を届ける仕出屋さんの姿が各所で見られる。他にも、着付けを担当する男衆さんと呼ばれる人々が、芸妓や舞妓の着付に向かう姿などが見られ、町全体で花街の文化を支えている様子が感じられる。

そして、花街の活動は、花街内部だけにとどまらず、祇園祭の花傘巡行への参加や、時代祭の行列参加など、京都の代表的な年中行事における重要な役割をも担っており、京都の町衆としての営みを見ることができる。

落ち着いた町並みによって引き立てられる芸舞妓や町の人々の姿、時おり耳にするはんなりとした京ことばの会話、これらは全て、人々をもてなす花街の文化を感じさせる。

—文化・芸術のまち京都—

(1) 文化・芸術のまち京都

京都は、平安遷都以来およそ1100年の間、わが国の都であり、それを支えてきた公家の文化が綿々と伝えられてきた。その公家文化は、室町期以降の武家文化とも融合し、京都は洗練された日本文化の中心地としてあり続けた。近世に入ると、それまでの文化に町人文化が加わった。この時代には、政治的中心は江戸に移ったが、文化的中心は依然として京都にあった。そして、これらのことを背景とした京都は今もなお、文化・芸術が広く市民生活の中に浸透し、日常的な暮らしの中に息づいている。

この項では、現在京都で行われている能・狂言などの伝統芸能、茶の湯やいけばななどの市民の間で親しまれている伝統文化、伝統に培われてきた美術などを例として、文化・芸術の地である京都の歴史的風致を示していく。

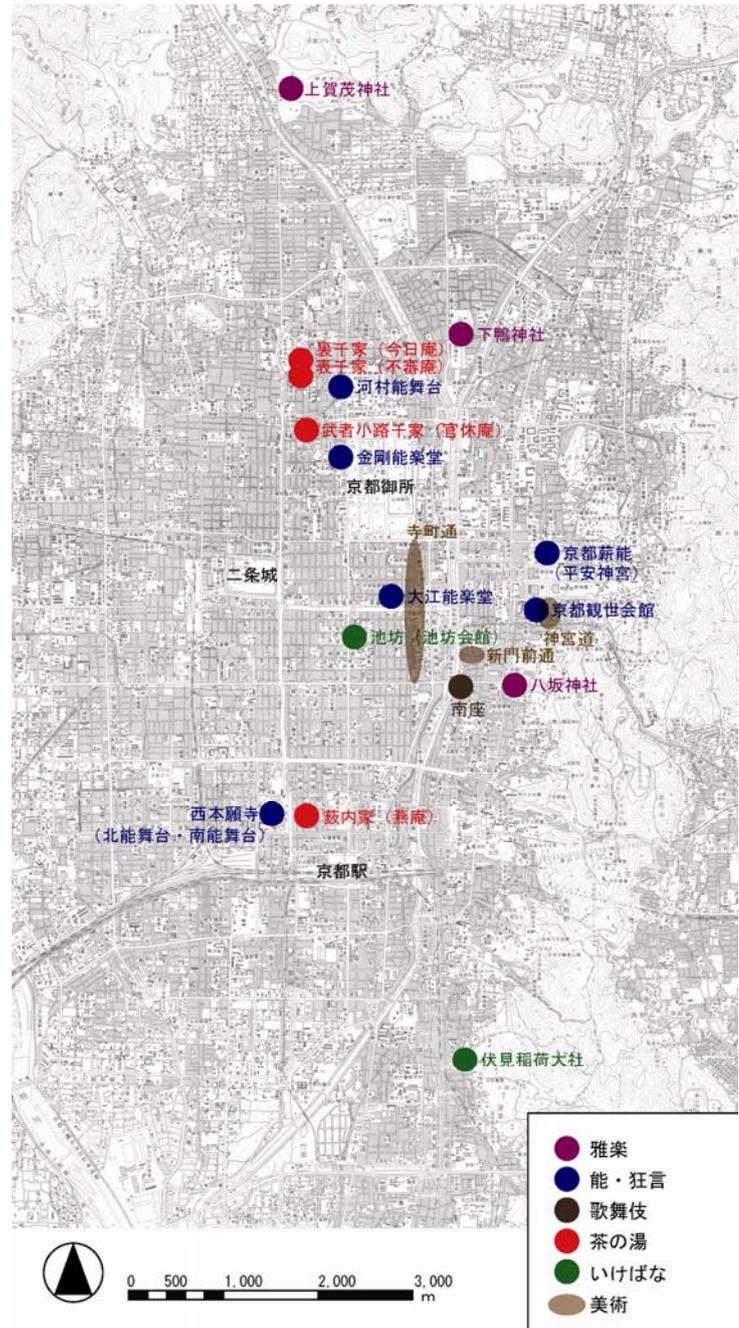


図2-50 文化・芸術のまち京都（具体事例箇所）

ア 具体事例

(7) 雅楽

「雅楽」は、平安遷都以前に生まれた歌と舞、管・絃・打楽器が一体となって繰り広げられる総合芸術で、雅な雰囲気にも包まれた日本の伝統芸能である。10世紀に宮中のほか南都や天王寺に雅楽を司る楽人の組織である「楽所（がくそ）」が成立し、中世末期から近世初頭にかけて、京方（宮中・京都）、南都方（興福寺・奈良）、天王寺方（四天王寺・大阪）の「三方楽所」と呼ばれる雅楽の伝承組織が整えられた。

明治6年（1873）に雅楽に関する制限が解かれ、現在のように誰もが雅楽を演奏することができるようになると、京都でも雅楽を演奏する「雅楽会」が結成され、それ以降、京都の多くの寺社を始め全国の有名寺社で演奏が行われるようになった。

現在、各神社の祭礼や初詣などで雅楽は不可欠な存在となっており、人々が雅楽に触れる機会も多い。

『京都の祭礼』の項で示した盛夏に行われる祇園祭で広く知られている八坂神社において奉奏される「東遊」でも雅楽が演奏されている。この「東遊」は天延3年（975）に、疱瘡の災を除くため、朝廷より奉幣したことが始まりと言われ、毎年6月に行われている。また、賀茂別雷神社（かもわけいかずちじんじゃ、通称、上賀茂神社）や賀茂御祖神社（かもみおやじんじゃ、通称、下鴨神社）の社頭の儀においても雅楽は演奏され、時間がゆったりと流れるような舞や音色は、人々を厳かで雅やかな王朝の世界に誘っている。

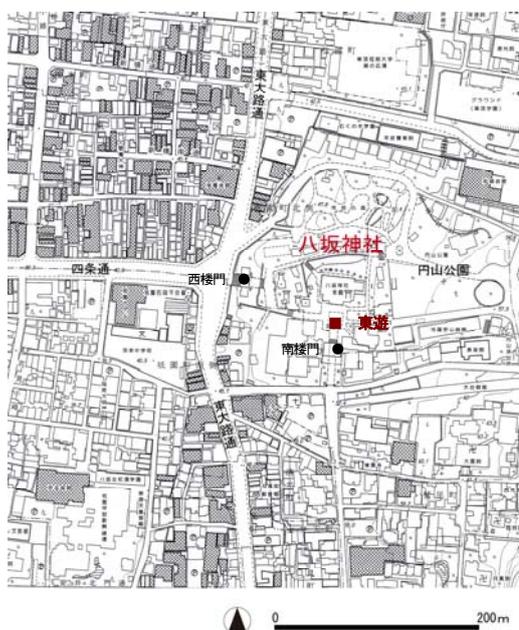


図2-51 東遊（八坂神社）



写真2-83 東遊（八坂神社）
提供 八坂神社

このような営みが、舞台となっている寺社等の歴史的な建造物と一体となって、境内やその周辺において展開され、平安時代から綿々と続く宮廷の雅さに、京都の伝統文化を感じさせる。

(イ) 能・狂言

室町時代に開花した京都の文化を代表する「能」は、江戸時代まで「猿楽」と呼ばれており、平安時代に宮廷で演じられていた唐に由来する「散楽」と平安中期に生まれた「田楽」が「猿楽」に大きく影響を及ぼし、室町時代に今日の能楽

の基礎を成した。

「能」は、観世流、宝生流、金春流、金剛流、喜多流の五流派があり、各家元は江戸時代に江戸に移ったが、現在京都には一時衰退しその後に再興した金剛流の家元がある。金剛能楽堂は、明治初年金剛家の祖野村三次郎直寛が石清水八幡宮の能舞台を買い取り自宅に移築したものであり、元は室町にあったが平成15年に現在の地（烏丸今出川下る龍前町）に新たな「金剛能楽堂」が開館し、その際、130年近い歴史を持つ能舞台がそのまま移築された。ここでは、数々の能などの公演が行われている。

一方、江戸時代の京都では、能の歌詞である謡曲を歌う「謡」が一般の人々に流行していたことから、後に「京観世五軒家」と呼ばれる家々が観世流の素謡^{すうたい}を広めるとともに、「京観世」という固有の文化を形作った。観世屋敷の管理や運営を任された片山家は、現在も京都における流派の中心的存在であり、能楽は観世会館を中心に定期的開催されている。また、その他の観世流の能楽堂としては、明治時代後期に建てられた京都最古の能楽堂「大江能楽堂」や「河村能舞台」などがあり、ここでも定期的に公演が行われている。

能と同様に猿楽から発展した「狂言」は、明治期以降は、能、式三番と併せて「能楽」と呼び、能の一部として演じられる「間狂言」のほか、いわゆる独立して演じられる「狂言」がある。近代以降、京都では「お豆腐主義」を公言する茂山千五郎家が庶民的な狂言を演じて、好評を得た。江戸家元のものは武家式楽の伝統を今に残す古風で剛直な芸風に対し、茂山千五郎家は写実的で親しみやすい芸風である。

能・狂言が行われる能舞台は、もともと舞台部分には屋根がかかっているが観客席は露天となっており、現在のように能舞台と観客席とが一屋根の下に収まった「能楽堂」になったのは明治14年（1881）に建設されたものが最初である。

西本願寺には、天正9年（1581）の墨書があり、現存最古といわれる能舞台「北能舞台（国宝）」や「南能舞台（重文）」があり、毎年5月の親鸞の誕生を祝って催される行事、「宗祖降誕会（ごうたんえ）」では、この南能舞台で祝賀が演じられ、多くの参拝者に披露されている。



写真2-84 市民狂言会(第214回市民狂言会より)

他にも京都の寺社等には能舞台を持つところが多くあり、今なお能や狂言が演じられる舞台として、活躍している。

また、京都薪能は、毎年6月の夜、平安神宮で行われており、平成21年度（2009）で60回を数える初夏の風物詩となっている。夕方から能を始め、日が暮れるとかがり火を焚き、屋外での奉納の風情を醸し出している。平安神宮を舞台に幽玄の世界が繰り広げられる。

能や狂言、謡の舞台は、能楽堂などの歴史的な建造物だけではない。京都の旧市街地に残る京町家の前を通ると、謡の声や鼓の音が聞こえる。また、能の稽古のために京町家の2階座敷を板張りにしている所もある。

このように、歴史的な能舞台などで演じられる能・狂言は、寺社等の歴史的建造物や、町の各所から聞こえる謡に親しむ市民の声、周囲の歴史的町並みと一体となり、人々の趣味の奥深さと情緒を感じさせる。

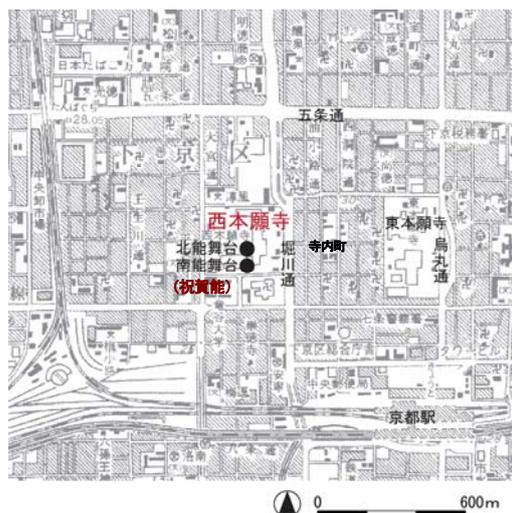


図2-52 宗祖降誕会 祝賀能（西本願寺）

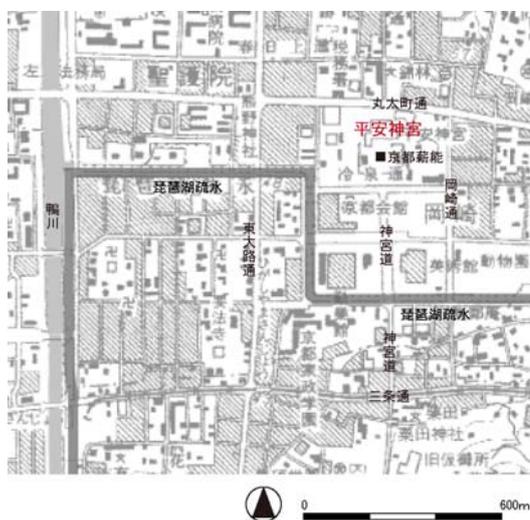


図2-53 京都薪能（平安神宮）



写真2-85 京都薪能

(ウ) 歌舞伎

師走に入り、京都南座に顔見世のまねき看板が上がると、京都では日々のご近所同士の挨拶の中に、「顔見世」の言葉が上ようになる。その彩りに、早くも正月気分がただよい、あわただしさも忘れてしまう。吉例顔見世興行は、古くから

京都の師走を彩る風物詩であり、寛政11年（1799）に発行された「都林泉名勝図会」には既にその様子が描かれている。

歌舞伎は、今から400年前、出雲阿国が北野天満宮の境内で「かぶき踊り」を踊ったのが始まりであると言われている。

南座は元和年間に京都所司代が公許した七つの芝居小屋の一つであったが、明治の時代まで存続したのは、南座・北座の二つのみであった。このうち北座は明治26年に廃絶し、南座のみがその位置もそのままに残された。建築物としては何度も建替えられているが、江戸時代初期からこの場所にあり、歴史ある劇場と言える。現在の建物（国登録有形文化財）は昭和4年に建てられたもので、平成3年に外観はそのままに内装を全面改修している。

顔見世のまねき看板には、その年の顔見世に出演する歌舞伎役者の名が一枚ずつ筆太の字で丸く大きく黒々と書かれている。歌舞伎独特の勘亭流という書体で、観客を招くための宣伝看板でもある。毎年11月下旬には南座の正面に、檜の一枚板の看板が2段にわたって掲げられる。

興行がはじまると、南座の前には待ちにまった人々で賑わい、吉例顔見世興行のために着物を誂える人もいる。

南座の建物とまねき看板、そして鑑賞に訪れる人々の姿が、師走のあわただしさを吹き飛ばすような、心浮き立つ京都ならではの華やぎを醸し出し、伝統的な風情を感じさせる。

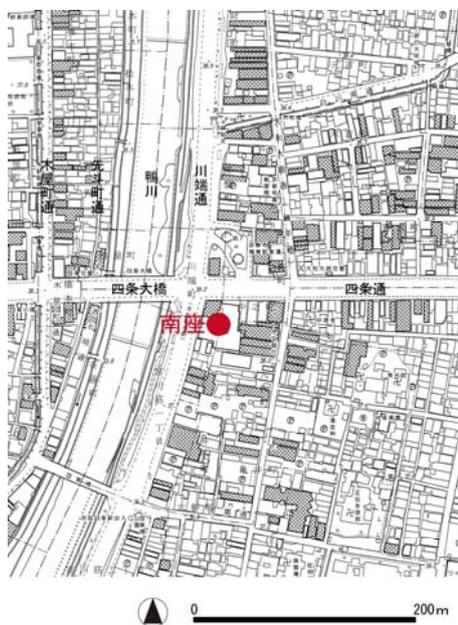


写真2-86 南座 まねき看板（平成19年の顔見世より）

図2-54 吉例顔見世興行（南座）

(I) 茶の湯

茶の湯は、慈照寺の東求堂（国宝）内の四畳半の同仁齋において、村田珠光等

が、禅門の儀式である茶礼から分離させた新しい茶礼に始まるとされる。その後、武野紹鷗※1に伝えられ、さらに門下の千利休において大成され、戦国武将の中で広がっていった。

利休没後、千家は利休の子の少庵により復興され、孫の宗旦の三人の子が、「表千家」、「裏千家」、「武者小路千家」を興し、三千家の基礎ができあがった。

江戸時代の元禄期になると、茶の湯は町人社会に広がり、三千家や藪内家の他、現在も伝統を守り続けている久田家、堀内家、速水家の茶家により多くの町人に普及した。

近代に入り、一般教養として茶の湯が取り入れられるようになり、人々の日々の暮らしの中で、親しまれるようになった。

現在、千利休や茶の湯と関係の深い大徳寺では、毎月利休の命日である27日に、塔頭「聚光院」において三千家が交代で、重要文化財の方丈や茶室の閑隠席などで法要や茶会が、またその他の塔頭でも茶会が行なわれる。



写真2-87 茶会の後

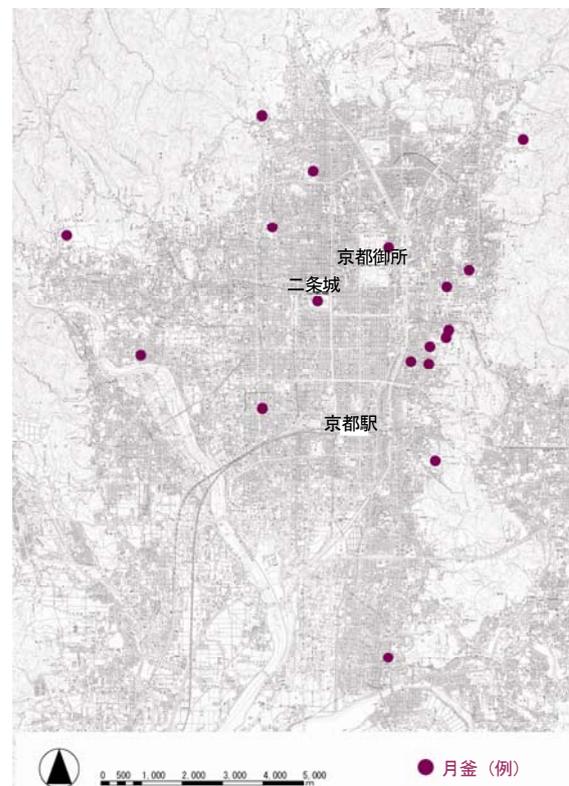


図2-55 京都の月釜 (例)

他にも、京都の神社仏閣では各家元の献茶奉仕が行われるほか、これらの寺社に付属する茶室等では「月釜」と呼ばれる会員制の茶会が普及し、御香宮神社、北野天満宮、梨木神社、大徳寺、など現在20箇所以上の寺社で月釜が行なわれている。新年の頃になると、和装姿で「初釜」に向かう人々が往来し、町並みに彩を添えている。また、御香宮神社や梨木神社は、名水があることで知られており、人々がお茶を点てる水などを汲みに訪れる姿が見られる。



写真2-88 小川通の町並み

茶道の家元である表千家（不審庵）や裏千家（今日庵）、武者小路千家（官休庵）の建ち並ぶ小川通の周辺は、全国から修業のために来訪した和装の人々が行きかい、華やかな雰囲気をかもし出している。また、風情ある茶道家の表構えは、日本的な美の世界である茶の湯のもてなしの心を自然に感じさせる。この小川通

りはかつて小川（こかわ）が流れていたところで、表千家、裏千家、武者小路千家の三千家が小川通りに面しているのは、良質の地下水がわくためであったと言われる。ここでは、茶の湯を手掛ける人々の日常の姿があり、行きかう和装姿の人々や、茶道具店に並べられた道具類もまた、町並みに風情を与えている。三千家とは場所が離れるが、藪内家（燕庵）は、世界遺産に登録されている西本願寺の東に位置し、その構えは本願寺界わいの風情を醸し出す一つの重要な要素となっている。

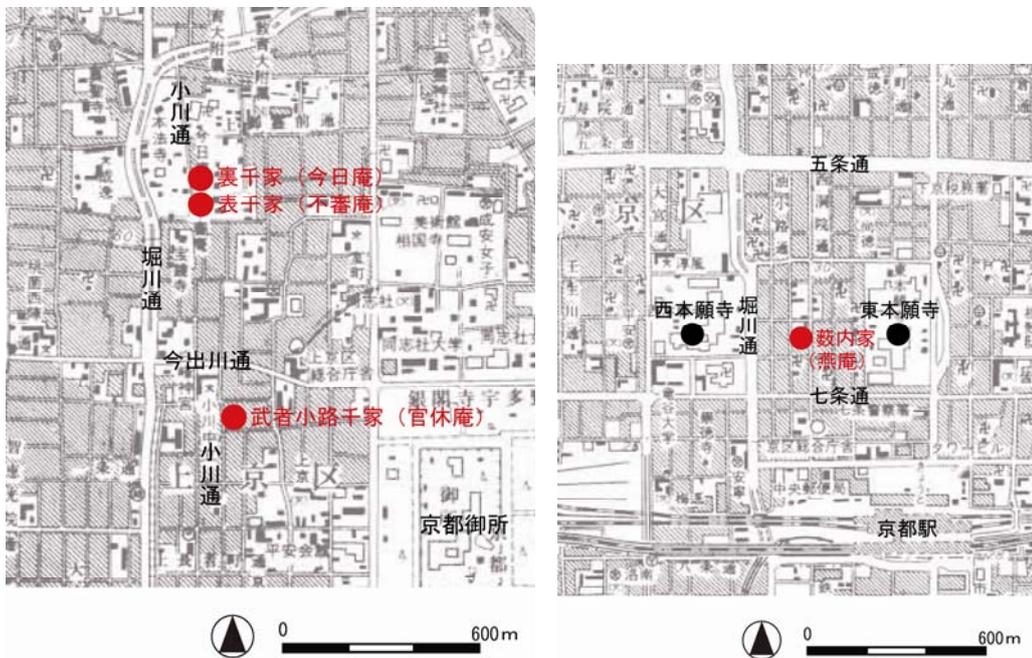


図2-56 三千家と藪内家

このように、京都の歴史的な寺社等において行われる茶会等の営みとそこに集う和服姿の人々の営みが、寺社等の歴史的建造物やその周辺の町並みと一体となって、静寂で落ち着いたある情緒を醸し出している。そして、小川通をはじめと

する茶道家元の並ぶ町並みにおいて、茶道に関わる人々の日々の生活、茶道具等を扱う営みが、茶の湯の本山である京都の歴史を感じさせている。

※1 武野紹鷗の鷗の表記は「メ」が「品」となっているのが正式である

(オ) いけばな

神前の依代や仏前に花を手向ける供花を源流に持つ「いけばな」の成立は、室町時代に珍しい花を唐物の花瓶に挿して並べ優劣を競う「花合わせ」や、仏教的行事「法楽」の飾りなどとも、深く関わっていたと思われる。

応永6年（1399）三代将軍足利義満は、完成した北山殿（鹿苑寺）で「七夕花合わせ」を催し、以後幕府において毎年行われる慣例行事となった。頂法寺六角堂の僧である池坊専慶は立花の名手と知られ、寛正3年（1462）佐々木持清に招かれ、金瓶に草花を数十枝挿した。それを洛中の好事家が競って見物したと伝えられている。

その後、同じく六角堂の僧である池坊専応は度々宮中に招かれて花を立て、また立花の理論と技術を体系化した「池坊専応口伝」を著し、華道が成立した。

江戸時代初期、三十二世池坊専好（1536～1621）は立花の名人で、禁裏において開催された立花会の指導をし、後水尾天皇の寛永文化サロンの担い手の一人となった。

現在、京都には「池坊」をはじめ、江戸時代中期に興った「松月堂古流」、その後の「正風遠州流」

や「専慶流」など多くの流派が存在し、一般庶民に教養として親しまれている。また、現代は大覚寺（嵯峨御流）、仁和寺（御室流）、泉涌寺（月輪未生流）など住職が華道の家元を兼ねていることも京都の特色であり、神社仏閣での展覧会も盛んに行われている。

京都の寺社等では、神仏に花を献じる「献花」も行われており、華道の源流である「仏前供花」の精神を見ることができる。伏見稲荷大社や三十三間堂では毎年池坊により献花の儀が行われる。和銅年間（708～715）に創建された伏見稲荷大社における朱塗りの外拝殿にて、礼式生けの所作で花が生けられる様子は、厳かでいて華やかな風情を醸し出している。



図2-57 六角堂（頂法寺）と池坊



図2-58 献花の儀（伏見稲荷大社）



写真2-89 伏見稲荷献花祭 1 提供：池坊



写真2-90 伏見稲荷献花祭 2 提供：池坊

また、先の「京町家のくらしと地域コミュニティ」の項に示した京町家の中でも、いけばなを嗜む人々が床の間などへ花を飾り、来客者をもてなすなど、人々の間でも日常的にいけばなの営みが行われている。

献花祭などの活動が、寺社等を舞台にして行われ、境内地において華やかな風情を醸し出し、また京町家等での営みにより、もてなしの心を感じさせ、訪れる人々に心の和やかさを感じさせている。

(カ) 美術

京都の絵画の歴史は古く、平安時代に描かれた源氏物語などの絵巻物の「大和絵」、宗教絵画、狩野探幽による御所や二条城の障壁画、琳派を確立した尾形光琳など数多くの優れた絵画や画家を生み出してきた。

近代に入ると、伝統と進取の気風に満ちた取り組みが盛んに行われ、東京と並んで日本の美術界をリードしていった。

そんな中、京都には美術と関わりのある町が形成されてきた。

その一つが寺町通りである。寺町の地に寺院が集められ、寺町といわれるようになったのは天正18年（1590）、豊臣秀吉の京都大改造計画の一環だった。

秀吉は洛中に散在していた寺院を、東京極大路があった辺りの東側に移転させた。集められた寺院の数は80か寺にもおよぶ。門前町としての体裁が整ってくるに従って、寺町通りの商店街も形成され、17世紀前後から、位牌・櫛・書物・石塔・数珠・挟箱・文庫・仏師・筆屋などの寺院に関連した店が立ち並び始めた。江戸時代初期に成立した「毛吹草」には、寺町通の名産として絵像や木像、紙表具、屏風といった、美術につながるものが示され、美術の町並みが形成されていたことが伺える。さらに、その他の店も並びだし、現在の寺町通りの商店街の基礎ができたという。現在でも、寺町通りには古美術や古書、日本画、洋画、版画を取り扱う店や、画廊などが先の「京町家のくらしと地域コミュニティ」の項に示した京町家などの歴史的建造物で営まれ、町の風景を形作っている。

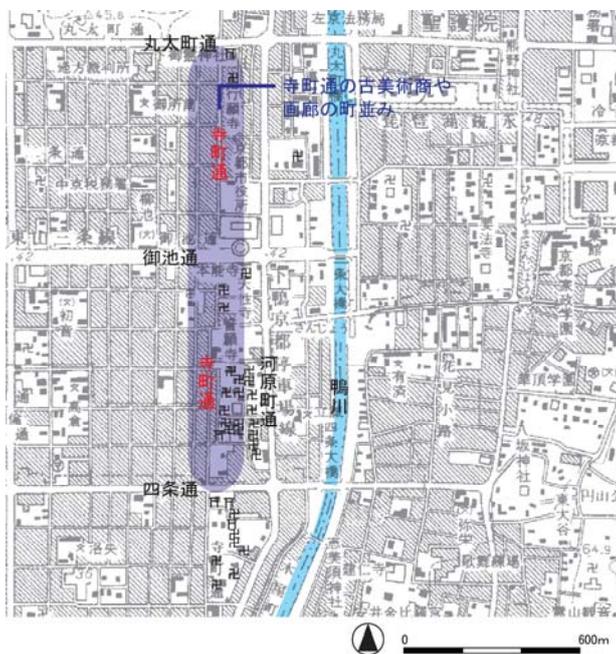


図2-59 寺町通



写真2-91 寺町通の店舗

新門前通およびその周辺地区も、古美術のまちとして有名である。この界限は、知恩院の門前町として元禄期を前後して形成され、古くは茶道具商が立地した。円山公園にホテルが建設され、この界限が河原町通りに入る散策道となることで、明治末期以降古美術商が集まり、情緒豊かな町並みが形成された。新門前通は、美術品を扱う同業者町を形成しているが、家主の人格を象徴するように、一軒として同じ家屋がなく、風情を凝らした町家建築で町並みが構成されている。その店先には、古美術商であることを匂わせるような美術品が展示され、町並みに彩りを添えている。

岡崎は、伝統と進取の気風の地として後に示すとおり、京都市美術館をはじめとする文教地区が形成され、文展を前身とする日展が行われるなど、近代以降の日本画と洋画の融合などの革新をはじめとする芸術の振興が今なお続く町である。

平安神宮への参道としての神宮道周辺には、多くの画廊があり、芸術の町としての顔を形作っている。



写真2-92 新門前の店舗

図2-60 新門前

このように、京都では、寺社の門前町や、近代の伝統と進取の気風の地において、美術品を扱うことを生業とする町が形成され、そこでは現在でもそれらの営みが続けられている。それらの町で、町家等の歴史的建造物に美術品や関連の品々が並べられ、数々の趣きある店が町並みを形成している。

店内のしつらえや美術品などが京都の美術の歴史を感じさせるとともに、門前町と近代の伝統、進取の気風の地が融合された風情を楽しませる。

イ 文化・芸術のまち京都に見る歴史的風致

例に示した以外にも、京都では様々な芸術・文化活動が行われている。香木を焚きその香りを聞く香道では、老舗において香道の教室が開かれ、また、嗜みとして匂い袋をしのばせる人もある。さらに、茶の湯とともに煎茶も寺社等で茶会などが行われているなど、その分野は多岐に渡っている。

このように、京都では、これらそれぞれの営みが、寺社をはじめとする歴史的な建造物や町並みの中で繰り広げられ、その音や彩色、取り巻く雰囲気は、歴史の重層性と伝統の重さ、そして京都の芸術・文化の奥深さを感じさせ、今なお京都が芸術・文化のまちとしての地位を保っていることを感じさせる。

—伝統と進取の気風の地—

(1) 古都の再生と文教地区の形成

明治維新により、京都は東京遷都という大きな変動を迎えた。天皇だけでなく、新政府の官僚、多くの公家衆、各藩の京都詰役人、そして一部の御用商人も京都を離れた。そんな逆境にも負けず、伝統と進取の気風を併せ持つ京都の人々は、再生に向かって自前の産業や都市機能を作り上げ、近代化を成し遂げた。その象徴として琵琶湖疏水があり、建都千百年記念事業の開催地である岡崎がある。

この項では、まず近代化の象徴である琵琶湖疏水について示し、そのうえで、岡崎についての歴史的風致を示していく。

ア 近代化とうるおいをもたらす琵琶湖疏水

京都には、寺社仏閣だけでなく実は、琵琶湖疏水に代表される近代歴史遺産の宝庫でもあり、この先進の自負が、京都に暮らす人々にとって誇りであり、心の拠り所のひとつにもなっている。

東山山麓一帯は、京都の近代化の源となった琵琶湖疏水（国史跡）や京都大学の創設が行われたが、特に琵琶湖疏水は、明治維新による東京遷都で衰退した京都に活力を呼び戻すため、近代化策（京都策）の事業の一環として、明治23（1890）に建設された。京都にとって、琵琶湖から水を引くことは長年の夢であった。疏水によって水運、水道事業をはじめ発電事業や市電敷設等が行われ、今日における京都の近代的まちづくりの基礎となった。



図2-61 琵琶湖疏水



写真2-93 琵琶湖疏水



写真2-94 蹴上発電所(非公開)

この疏水は、開削から120年余りが過ぎようとしている現在においても脈々と琵琶湖から京都市へ命の水を供給し続けている。その本来機能のみならず、岡崎では、優れた近代土木景観と緑豊かな水辺空間という観点からも、市民に親しまれている。例えば岡崎東端には、日本で二番目の開設となる京都市動物園があるが、その脇を流れる琵琶湖疏水の南禅寺舟溜りには、琵琶湖との水位高低差を利用した自然噴水があり、園内の桜並木と合わせて、市民にとっては欠かせない京都の風景のひとつとなっている。



写真2-95 南禅寺舟溜り



写真2-96 南禅寺水路閣

岡崎では、専用管により疏水の水をまず京都市動物園に引き入れ、園内の水路や池を経て、岡崎道をはさんだ西側の京都市美術館の庭園と北側に位置する平安神宮神苑（国名勝）へと落とし込んでいる。南禅寺界限でも同様に、碧雲荘や對龍山荘（国名勝）などいくつもの庭園を次々と巡る水の道が何ルートも存在する。全体の仕組みそのものが疏水の開通と7代目小川治兵衛という庭師との出会いが生み出した近代の庭園風景の形成に重要な役割を果たしている。さらに、哲学の道をはじめ疏水沿線は散策の場として市民に親しまれている。



写真2-97 京都市美術館 庭園

イ 具体事例

(7) 建都1100年事業と平安神宮

この疏水事業の中心の地、岡崎において、開削後の明治28年(1895)、建都千百年記念事業として、第4回内国勸業博覧会と平安遷都千百年記念祭が開催された。それまで東京を会場としていた内国勸業博覧会の京都における開催は、当時の総理大臣伊藤博文が、記念祭との合同開催によって日本の歴史を世界に向けて示すことを目的に決定したとされている。

記念祭場として桓武天皇を祭るため造営された平安神宮(市指定有形文化財)は、その社殿が平安京大内裏の朝堂院を模したもので、京都の氏神と位置付けられた。三条通りから北側の旧栗田口通り(現神宮道)は、平安神宮の表参道として位置付けられ、明治27年(1894)に道路拡張された。昭和3年(1928)には大鳥居(国登録有形文化財)も建築されている。記念祭の呼び物として行われた時代行列は、1100年にわたる京都の都としての風俗の変遷を描いており、以後、この行列は「時代祭」と呼ばれて今日まで続けられている。この記念祭と内国博は、京都の都としての歴史を再確認するとともに、近代京都としての出発を強く印象付ける事業となった。

時代祭は、京都市全域から組織される「平安講社」がその運営に当たり、元学区と呼ばれる自治組織の連合会が輪番制でこの祭りを担っている。京都御所から平安神宮に至る時代祭の巡行路は、京都の時代変遷絵巻を彩る行列の舞台となっている。市民はこの祭の運営を担うことによって、京都の歴史に想いをいたす特別な時間を過ごす。そして、岡崎の地の平安神宮は、京都の1100年の歴史のシンボルとして存在しているのである。

平安神宮は、伝統と進取の気風の地である岡崎にふさわしく、伝統を基盤に置いた新しい試みがなされる場として現在も活躍している。中でも、昭和25年(1950)に京都市と京都能楽会の共催で始まった京都薪能は、平成21年(2009)の6月に60回目を迎え、初夏の京都の風物詩となっている。平安神宮の^{いみだけ}拝殿前に特設舞台を組み、四隅には斎竹を配し、夕闇が迫るころ、かがり火の炎が揺らめく中で夕闇に浮かび上がる社殿を背景に、幽玄の世界が繰り広げられる。



写真2-98 京都薪能



写真2-99 時代祭(平安神宮前)



写真2-100 大鳥居

このように、伝統と歴史と近代への躍進の地である岡崎では、近代以降、伝統を基盤とした時代祭や京都薪能などの新しい活動が生まれ、既にそれ自体伝統として根付いている。これらの活動が、この地の象徴である平安神宮と一体となって、京都の風物詩として市民に受け入れられ、楽しみの一つとなっている。

(イ) 文教地区としての岡崎

記念祭・内国博に引き続き、博覧会跡地には、シンボルとしての平安神宮を中心にして、美術館、工業館などの施設が残され、常設の展示場として利用された。その後、東宮御慶事に際して寄せられた寄付を利用し、學術の府を唱える京都市にふさわしい事業として、武徳殿（明治31年（1898））が開設されたほか、動物園（明治36年（1903））、商品陳列場、府立図書館（明治42年（1909））、大正期以降も京都市公会堂、大札記念京都美術館（現京都市美術館）（昭和8年（1933））などが建設され、文教地区として整備されていった。

この文教地区の整備は、京都が1100年にわたって培われた伝統と歴史の基盤の上に、新しい近代西洋文明を受け入れて実現されたものであり、岡崎の地はここから、新しい京都の産業や文化の拠点として、市民とともに新しい近代都市景観と、歴史を背景とした新たな文化芸術活動等をつむぎだしてきたのである。

岡崎地区内には近代のまちとしての要素となっている数々の建物があるが、京都市美術館は、その代表的な建築物の一つである。東京から京都に洋画研究の新たな活動の地を求めてきた浅井忠を慕って、若き画家たちが明治39年（1906）岡崎の地に、関西最大の洋画研究所「関西美術院」を創設した。ここからは安井曾太郎をはじめ梅原龍三郎、須田国太郎らわが国を代表する画家達が数多く輩出し、京都は日本的洋画の発展のメッカとなった。現在もその伝統は続いており、昭和8年（1933）に完成した京都市美術館、そして国立京都近代美術館とともに、岡崎の地に美術の香りを醸している。

京都市美術館は、明治40年（1907）に「文展」として始まった100年もの歴史を誇る「日展」が開催されることで知られる。

明治40年（1907）に創設された「文展」は東京で開催されたが、明治43年（1910）の第4回は京都でも誘致し、「京都市博覧会館」で催した。その後、東京と京都での開催が定着し、京都市勧業館を主会場に、毎年行われていたのだが、昭和8年（1933）に「京都市美術館」が開館すると、まさにふさわしい会場として歓迎され、その後京都市美術館の主要な催しの一つとなった。「文展」は「帝展」という名称を経て昭和21年（1946）には「日展」と改称され、京都以外の地方展も行われるようになり、現在に至っている。現在、「日展」においては、日本画、洋画、彫刻、工芸美術、書の5部門で構成され、今なお公募展の中では最高の権威を誇っている。

毎年春に開催される、新進作家の登竜門としても知られる「京展」は、昭和10年（1935）に始まる「市展」の流れを汲む全国公募展であり、日本画、洋画、彫刻、工芸、書、版画の6部門で構成される。

また、平安神宮参道として整備された神宮道の沿道には、多くの画廊が存在し、様々な美術品が展示され、芸術のまちとしての雰囲気醸し出している。

他にも、前川國男が設計し、昭和35年（1960）に会館したモダニズム建築・京都会館は平成21年現在、既に49年の歴史を持ち、多くの音楽や演劇、芸能を市民が身近に楽しめる場として、そして市民の文化的欲求を満たす文化創生の拠点として、長く愛されている。労演で親しまれる京都労働者演劇鑑賞会などは開館当初から続くもので、会館とともに歴史を刻んできた。



写真2-101 京都市美術館



写真2-102 京都会館

このように、岡崎の文教地区では、日展等の展覧会や演劇公演等の芸術活動が、京都市美術館や京都会館をはじめとした近代洋風建築群を舞台として行われ、さらに周辺で営まれる画廊などの風景と一体となって、文教地区としての風情を醸し出し、訪れる人々は、薫り高い文化と芸術の世界を感じている。



写真2-103 画廊と鳥居

明治45年（1912）に烏丸通が
 拡幅されると、次第に銀行や企業の事
 務所は烏丸通沿いに移転していったが、
 ビジネスセンターが移転することで、
 三条通には、多くの近代建築や町家等
 の伝統的店舗の混在した町並みが更新
 されることなく存続する結果となり、
 明治・大正期の面影を残す京都を代表
 する町並みが残されることになった。



写真2-104 三条通り



図2-63 三条通

現在、三条通は、歴史的な京町家や中には京都にはあまり見られない塗籠られた京町家、そして町家と比較すると圧倒的にヴォリュームの大きい近代洋風建築など、近世から現代にいたる各時代の建物が混在している。

このような町並みの中で、交通の要衝であった近世の頃から、足袋屋を営む分銅屋足袋などの伝統工芸品などを商う店や、終家旅館などの旅館の営みが今でも行われている。

分銅屋足袋は、創業元治元年（1864）の老舗足袋専門店です。



写真2-105 分銅屋足袋

まいは商家の意匠を残し、特に袖看板から昔から商業の地だったことを思わせる。現在でも、足型のはがねやミシンを使い、伝統的な白足袋や狂言足袋などのほかに、50年程前から京友禅を使用した足袋も作られている。袖看板や暖簾から視覚と、店の奥から聞こえるミシンの「コトコト」という響きによる聴覚によって、昔ながらの店の趣と営みを漂わせている。

また、通りから筋を折れると、老舗旅館が立地しており、凜としたたたずまいのなか、京都に来訪する人々を迎え、もてなす営みが、昔と変わらず行われている。



写真2-106 柊家旅館

文久元年（1861）に旅館業の看板を掲げた柊家旅館の初代は福井県人で、文政元年（1818）に上洛し、郷里の海産物を商い、運送業を営むかたわら、郷里から京都に来る人などを乞われるまま泊めていたので、旅宿を副業としていた。その後、副業を本業としている。

これらの伝統的な建築とは対照的に近代以降に商業・業務施設として建てられた、旧日本銀行京都支店（現京都府文化博物館別館：重要文化財）や旧毎日新聞社京都支局（現1928ビル：京都市登録文化財）、家邊徳時計店（国登録文化財）、旧不動貯金銀行京都支店（SACRA）（国登録文化財）、などの近代洋風建築が現存し、当時の面影をよく残している。これらの内の多くは、用途を変えて活用されている



写真2-107 旧日本銀行京都支店

提供 京都府京都文化博物館



写真2-108 中京郵便局

が、中には中京郵便局のように、変わらない用途で使用されているものもある。中京郵便局は、明治4年に郵便事業が発足した際に、姉小路車屋町に設置された西京郵便役所が前身である。現在の建物は明治35年に建設されたもので、現在も中京郵便局（旧庁舎外観：京都市登録文化財）として活用されており、江戸時代には飛脚問屋の多かった三条通における近代化を象徴的に表している施設であろう。また、他にも旧毎日新聞社京都支社のホールは、現在でも市民の利用できるホールとして活用されるなど、当時の商業・業務施設の趣や営みを残しているものもある。さらに、繊維関連企業は往時ほどの規模ではないものの、今なお多く存在している。

このように、三条通は近世以来の京町家や近代以降の近代建築などが混在する中であって、土産物屋や旅館など、近世の交通の要衝としての営みが京町家等の歴史的建造物において今なお行われ、京都を訪れる人々の姿を多く見かけることができる。人々は近世から近代、そして現在までの歴史の変遷を町並みとその中の営みを通じて感じることができる。

イ 大都市を支えた地域に見る歴史的風致

大都市を支えている経済・業務の中心地は、町の形態や構成要素が様々に変化しながら発展していく。したがって、様々な時代の様式の建築物が混在し、また業務形態もそれぞれの時代を特徴づけるものが混在することになる。

つまり、三条通に代表されるような、近世以前から町を形成し近代以降も中心地として発展してきた場所では、京町家等の歴史的建造物が家業とともに大切に受け継がれながら、その横では近代以降の新しい様式である近代洋風建築が様々に活用されており、京都の都市の奥行きを感じることができる。

—京郊の歴史的風致—

(1) 舟運を支えた地域

この項では、豊臣秀吉により城下町が形成され、その後舟運により発展を遂げた酒造でも知られる伏見とその周辺の地域についての歴史的風致を示していく。

ア 伏見とその周辺の歴史

(7) 豊臣秀吉、徳川幕府による城下町の建設

京都市の南東部に位置する伏見地域は、万葉集にも詠まれるなど、古い歴史を有する地域である。既に平安時代から淀川の舟運と陸路で京都と大阪を結ぶ物流の中継地としての役割を果たしてきた。

この伏見のまちが大きく変わったのが、豊臣秀吉による伏見城の築城と城下町の建設である。伏見の城下町の建設は、豊臣秀吉が伏見城を築いた文禄3年（1594）から始まる。城下町の建設に当たり、秀吉は伏見に水陸交通の機能を集中させるため、周辺の地形を大きく変える大土木工事に着手した。文禄3年、秀吉は直接巨椋池に流れ込んでいた宇治川を榎島堤によって分離北上させ、伏見城下に引き入れた。また、三栖から淀に至るいわゆる^{たいこうづつみ}太閤堤を築造し、宇治川を西流させて淀川へと直結させた。

文禄5年（1596）の大地震により伏見城も城下も壊滅したため、改めて城下町が再建され、城下は、東西4km南北6kmの広大な地域に及び、碁盤目状に整然と区画された。「四つ辻の四つ当たり」と呼ばれている東本願寺伏見別院前の道路のほかは、城下町特有の遠見遮断や袋小路が見当たらず、またその区画のほとんどが全国六十余州の大名たちの屋敷で占められていた。町人地は街道沿いや濠川（外堀）の西側に配され、とくに大和街道沿いにあたる京町通りは往来する人々で賑わっていた。現在の伏見の市街地は、この城下町の都市構造が基盤となっている。

この伏見城が廃城になり、それにかわって徳川幕府により新たに淀城が築城され、城下町が建設された。淀は、宇治川・桂川・木津川の3川が合流する付近に位置し、早くから軍事上、交通上の要衝として知られたところで、10万石余を擁する淀藩の城下町として賑わった。しかし、淀城は、慶応4年（1868）の鳥羽・伏見の戦の際



写真2-109 淀城跡の石垣

に炎上し、天守台と本丸の西・南側の石垣、内堀の一部等が残るのみである。現在は、淀城跡公園として整備され、市民の憩いの場となっている。また公園の北側は明治時代に水垂より移された与杼神社（拝殿：重要文化財）の境内になって

おり、淀城跡と相俟って歴史的な雰囲気醸し出している。

(イ) 高瀬川の開削による港町としての発展

江戸時代に入ると、京都の豪商・角倉了以が、慶長19年(1614)に高瀬川を開削した。これより高瀬川を通じて伏見から京都へも舟で輸送できるようになり、舟運による物流の拠点機能が高まり、港町として、そして水陸の交通の要衝にある宿場町としてさらに繁栄することとなった。この当時、淀川を伏見から大阪まで往来していたのが十石船や三十石船で、それらが舟運の中心的役割を果たしていた。

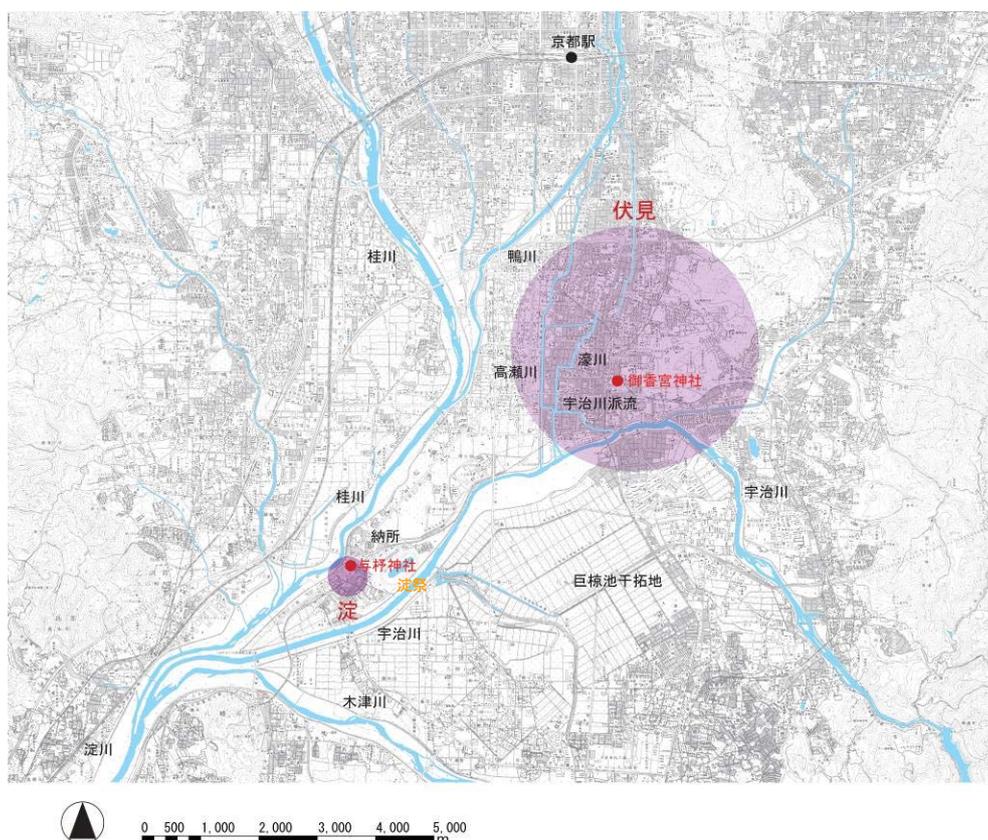


図2-64 伏見と淀

イ 伏見のまちと酒どころ

かつて伏見は「伏水」と表され、良質な地下水が豊富なところとして知られていた。現在も近郊の祭礼行事の中心社として広く信仰を集めている御香宮神社は、平安期、境内から病気に効く香水がわき出たため清和天皇からこの名を賜ったといわれている。文禄3年(1594)から始まる秀吉による城下町の建設以降、この良質で豊富な地下水、そして舟運などの物流機能、城下町・宿場町としての発展による酒の需要の高まりなどを背景に、伏見の酒造は盛んになり、江戸初期から本格化

した。天保12年(1841)に刊行された「泰平伏見御役鑑」には、明暦3年(1657)における酒造屋株の存在が記されている。

伏見の酒が飛躍的な大発展をとげたのは、明治以降である。酒の腐敗防止のため、当時はまだ珍しかったビン詰めの商品に力を入れたり、汽車を利用して東京への売り込みに努めたりするなど、数々のアイデアと努力が実を結び、全国に流通するきっかけをつくった。

伏見では今も京都を代表する銘酒が数多く造り続けられている。伏見区内の南浜、板橋、住吉を中心とする区域に多くの酒造会社が点在しており、大正時代に建造された月桂冠旧本社・黄桜酒造(清酒工房)・松本酒造などの歴史的建造物では、現在もお店舗や工房として営みが受け継がれている。冬季に伏見のまちなかを歩いているとどこからともなく新酒の香りが漂う。

また、現在、伏見にある多くの蔵元が伏見酒造組合に加盟し、酒造仲間の心意気を受け継ぎながら積極的に活動しており、約400年の歴史をもつ伏見の酒造の歴史などを紹介する記念館を中心に多くの酒蔵が並んでいる。

伏見の酒は、きめの細かいおだやかでソフトな風味を特徴としている。これは主として低温長期のもろみ発酵と、発酵末期に四段仕込みを活用することによって生まれ、洗練された京料理とともに発展してきた。

素材の風味を生かしながら、しっかりと味付けされた京料理に合う酒として、コクがあり、きめの細かいソフトな風味がはぐくまれてきた。

伏見の蔵元の杜氏たちは、越前・丹波・但馬・南部・広島等様々な地域からやって来る。こうした多流派による技の競争が今日の伏見の酒質を作り上げてきたともいえる。

この酒造が行われている伏見のまちは、秀吉の城下町の都市構造と、かつて水運を担っていた高瀬川や濠川などの水路網が骨格となっている。現在、かつての水運の賑わいを復元しようと、期間限定で十石船と三十石船が宇治川派流を運航しており、水路から酒蔵や歴史を感じさせる風情を楽しむことができる。

また、町家と酒どころ伏見のシンボルでもある大規模な酒蔵が好対照を見せて建ち並ぶ佇まいが特徴的なまちを形成している。

特に酒蔵は、大規模な建造物でありながら、妻面が見せる深みのある陰影、漆

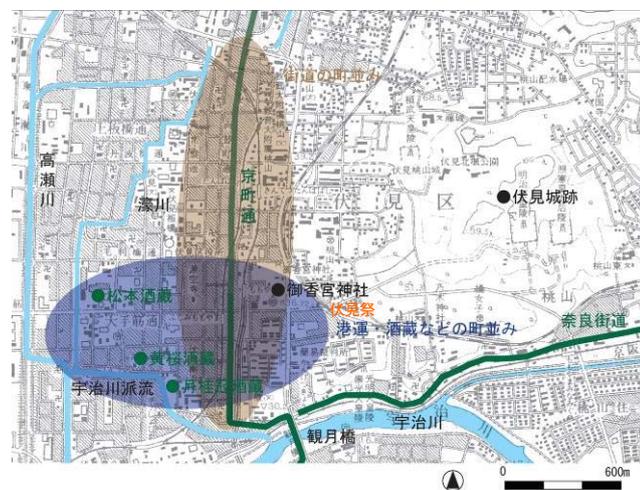


図2-65 伏見の町並み

喰壁、焼板壁及び瓦屋根などが独自の風情を醸し出し、酒どころとして近代から今日まで生き続けている伏見の人々の気概をうかがわせている。これらの酒蔵は、鳥羽伏見の戦いで酒蔵のほとんどが被災したため、明治以降、地下水をより有効に活用するため最良の地下水が湧き出る現在の地に構えられたものである。



写真2-110 酒蔵の町並み



写真2-111 十石舟

ウ 伏見やその周辺の祭礼行事

御香宮神社は、伏見の産土神とされる。その由緒は、式社内の御諸神社であるとも、九州の香椎宮であるとも言われるが、貞観4年（862）に境内から香水が湧き出たことから、御香宮と称したとされる。

文録年間（1592～1596）に豊臣秀吉が、伏見城の鬼門の守護として大亀谷に遷座したが、徳川家康が慶長10年（1605）にもとの場所に戻した。境内には、本殿、表門（重要文化財）など、桃山文化を象徴する建造物が点在している。

看聞日記では応永23年（1416）以降、9月1日に御香宮祭礼が行われていたという記事が散見される。現在は神幸祭もしくは伏見祭と呼ばれ、毎年10月上旬に数日にわたっておこなわれる伏見随一の祭である。

祭の初日と最終日の前日の2回、各町内から花傘が御香宮神社に集まる（花傘総参宮）。かつて、村ごとに競って趣向を凝らしたという花傘は、今も町内ごとに工夫をして作っている。また、最終日には、3基の神輿のほか、獅子、猿田彦命、稚児行列、武者行列が、趣向をこらした大小の花傘が氏子各町から「アラウンヨイヨイ…」のかけ声で参加し、夜遅くまで賑わう。

また、現在の能楽堂は明治時代のものであるが、年1回御香宮神能が行われている。

このほか、淀や納所などの産土神として鎮座している与杼神社うぶすなかみで毎年秋に行われる「淀祭」では、旧神社跡に向けて3基の神輿が担がれたのが始まりとされる神輿渡御が行われる。

エ 舟運を支えた地域における歴史的風致

このように、伏見・淀においては、城下町の都市構造を骨格として、川という京都の自然を生かした水運、名水を活かした酒造などの伝統的な人々の活動や神社な

どで行われる祭礼行事が現在もなお受け継がれ、酒蔵など歴史的な建造物を中心とした町家群等が建ち並ぶ変化に富んだ歴史的町並みと一体となった風景が今もまことに伝統が息づいていることを感じる。

(2) 景勝地としての洛外

京都の三山の麓の地は風光明媚な景勝地として古来より多くの人々が訪れた。平安遷都以来これらの地には、自然豊かな風景を楽しむため、貴族の別荘や隠棲の居、門跡寺院などの寺社が営まれた。またその風景は和歌や物語などの文学や絵画などの中に描かれた。このような地は、次第に名所として意識されるようになり、室町時代には庶民がこれらの景勝地へ訪れるようになった。

江戸時代になると、絵で見て楽しむ「都名所図会」などの発刊も手伝い、名所旧跡詣でが盛んになった。洛外と呼ばれたこれらの地域は、三山の麓の美しい自然の中に、寺社、庭園、史跡、あるいは和歌や物語などの文学の舞台のある場所として知られ、地方から多くの人々が京都を訪れた。そして、京都の人々は、京都の案内記や、京都へ来訪した人々の中で定着した京都を通してこれらの地を再認識し、来訪者を迎える営みを続けてきた。

この項では、嵯峨野を具体事例として、京都の洛外の景勝地に形成されている歴史的風致を示していく。

ア 具体事例：嵯峨野への景勝地詣で

嵯峨野は、古来より景勝の地として知られてきた。嵯峨という地名が現れるのは、平安京が営まれて間もなくのことで、平安京の原型とした唐の長安の近郊にある景勝地「嵯峨山」(峨眉山)から得たのが地名の由来と言われている。この地域は、船岡山や神楽岡と並んで聖なる丘の一つとされた双ヶ丘、愛宕山や小倉山などの山々、豊かな清流を湛える大堰川、一陣の風にさやさやと音を立てる竹林など、美しい自然に恵まれた地域である。

平安時代の嵯峨野は、貴族たちの狩猟の場だけではなく、美しい自然を愛で、そして親しむ別業地でもあった。

西園寺公経の別業地を足利義満が譲り受け、その没後に開山された金閣寺(鹿苑寺)、大徳寺実能が別業とした地に創建された竜安寺、光孝天皇の発願によって建立され宇多天皇が居を営んだ仁和寺、花園法王が別荘を喜捨して寺院とし、その後文明年間に中興された臨済宗大本山の妙心寺、嵯峨天皇が営んだ嵯峨院が元になった大覚寺、後嵯峨上皇が営んだ仙洞嵯峨御所に足利尊氏が創建した天龍寺など、嵯峨野をはじめとする洛西に点在する寺院の多くは、もとを辿ると皇族や貴族などの別業地を前身としている。

これらの寺社や庭園をはじめ、嵯峨野に広がる田園風景や農家、街道筋に立ち並ぶ民家などと美しい自然とが融合し、洛中とは一味違う洛外の伸びやかで美しい景

色が織り成されてきた。

そして、この嵯峨野は、様々な和歌や物語、謡曲の舞台となった。例えば、「源氏物語」の「賢木」の巻では、六条御息所の娘の斎王の潔斎地として嵯峨野の野宮が描かれている。「ものはかなげなる小柴垣」「黒木の鳥居どもさすがに神々しう見え」と描かれた野宮神社は、黒文字の枝を竹に結んだ垣根、黒い樹皮をそのままに立てた黒木の鳥居のたたずまいを持ち、物語の中の野宮の遺風を今日に伝えている。また、明石女君が来京した際の住居が大堰川の川べりに設定されており、光源氏が「大覚寺の南」に造作した「嵯峨野の御堂」（現在の清涼寺の地にあった棲霞観がモデルとされている）にかこつけて明石女君に会いに行く様子が描かれている。かつての大堰川の船遊びを偲ぶものとして、昭和3年に創始された車折神社の「三船祭」では、川面に浮かべられた色とりどりの舟が平安の雅を思わせる。

江戸時代には、これらの舞台が「名所」として人々に意識されるようになった。そして、寺社への参詣とともに景勝地詣でが隆盛した。嵯峨野は今も清水寺周辺に次ぐ京都を代表する名所となっている。

寺社への参詣や景勝地詣でが盛んになるにつれ、それらの人々をもてなすための産業が盛んになった。江戸末期に書かれた「筆満可勢^{ふでまかせ}」では、大井川河畔に宿屋の存在が示されており、また18世紀頃に書かれた司馬江漢の旅行記では、田楽茶屋の存在が示されている。現在でも、地元の竹を使った伝統工芸品などの土産物屋や料亭、料理旅館などが、嵯峨野、嵐山地域に点在し、和を基調とするそれらの建物が美しい景色に溶け込んでいる。

このように、嵯峨野の人々は、京の皇族や貴族が別業地を営み、また文学などに表現される風光明媚な嵯峨野の風景を大切にし、この景勝地を訪れる人々をもてなす営みが今なお続けられている。

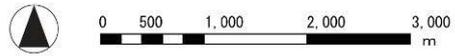
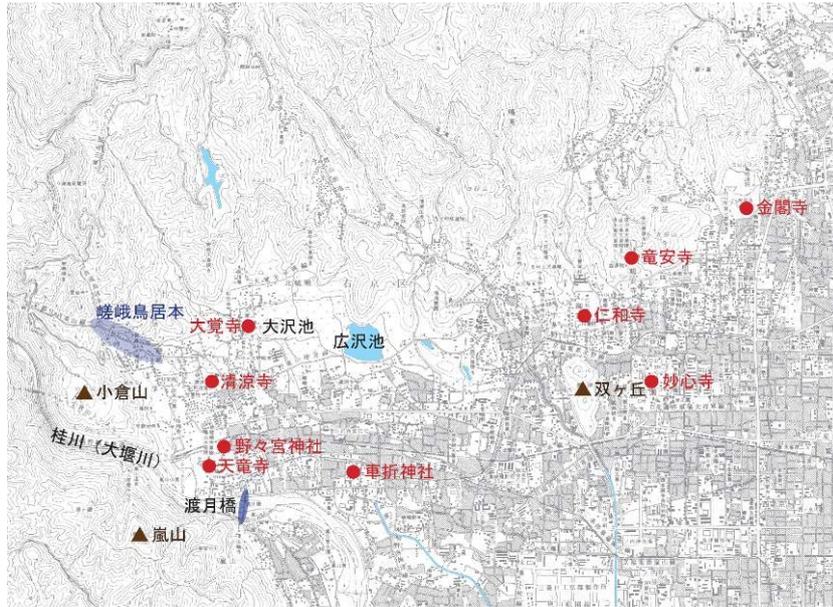


図2-66 嵯峨野の景勝地



写真2-112 西山から大沢の池, 広沢の池



写真2-113 嵯峨野の風景



写真2-114 大沢の池 大覚寺



写真2-115 大堰川 渡月橋



写真2-116 嵯峨野の土産物店

(2) 京街道と京の七口

京都では、1200年前に平安京が成立すると、すべての主要な道が平安京に通ずることになり、街道を通じて、京都で培われた文化が各地へ伝わった。

これらの街道の京都の出入口は、京の七口と呼ばれ、時代によって変わるが、現在も粟田口、荒神口、鞍馬口など地名として残り、人々の生活と強く結びついている。そして、これらの京都の出入口から各地に通ずる京都の街道には、鞍馬街道、若狭街道、伏見街道、山陰街道、愛宕街道、鳥羽街道などがありそれぞれに街道町や集落などが形成されている。

この項では、京都に通ずる主要な街道を例として、そこに形成されている歴史的風致を示していく。

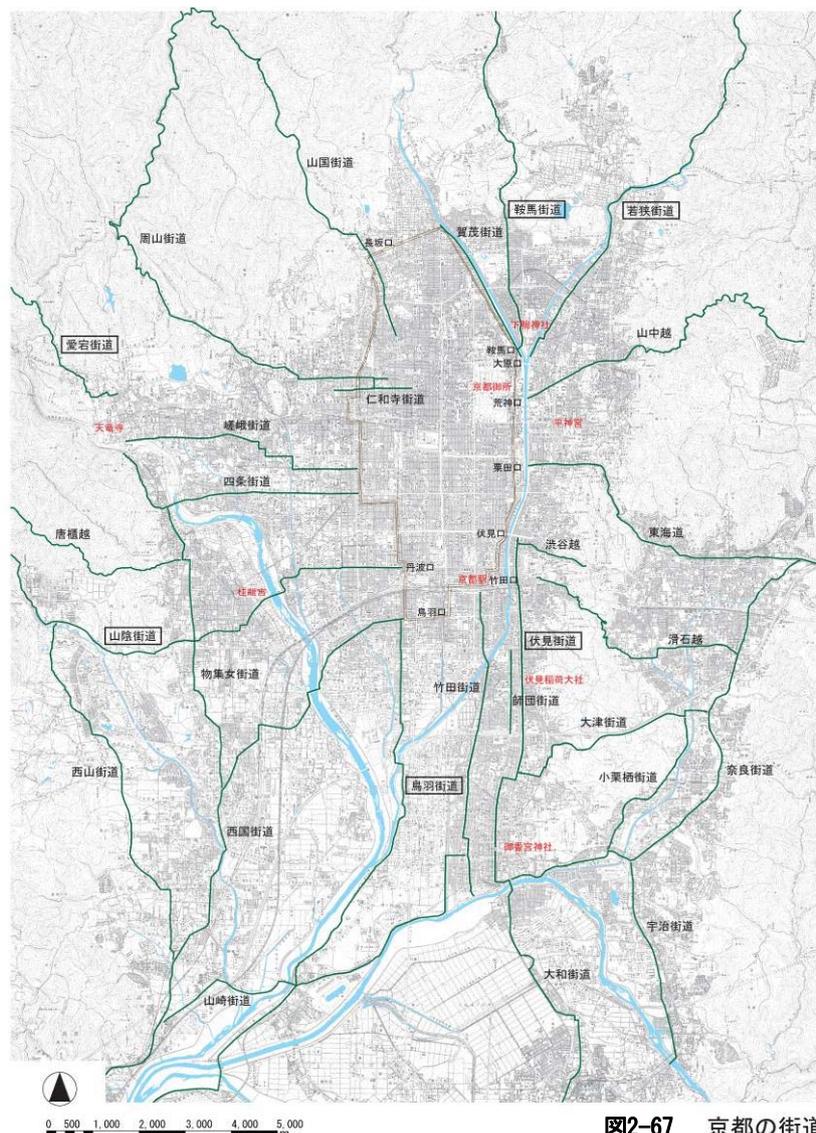


図2-67 京都の街道

ア 鞍馬街道

京都と丹波を結ぶ鞍馬街道は、物流の道として、また鞍馬寺・貴船神社への参詣道として平安期から利用された。この街道には、貴船へ向かう貴船道との分岐があり、さらに北へ進むと鞍馬寺の門前町へ至る。

(7) 鞍馬

鞍馬街道の要衝地である鞍馬は、鞍馬川に沿った山間の谷口集落である。平安遷都後、京都北方守護の寺院である鞍馬寺が創建されてからは、門前町として発展し、近世は、丹波からの炭の集荷、中継地としても栄えた。

a 寺社と門前町

鞍馬寺は、8世紀に創建されたと伝えられている。牛若丸（源義経）が修行をした地として知られ、木造毘沙門天立像などの、国宝や重要文化財に指定された仏像や文書等が残されている。鞍馬寺の境内にある由岐神社の歴史も古く、天慶3年（940）にこの地に鎮座したと伝えられ、豊臣秀頼により再建された拝殿は、桃山文化の建築として重要文化財に指定されている。

鞍馬の町並みを街道から見ると、周囲の山々が屋根越しに見えて、山が町並みの背景となり、合間に鞍馬川や川の向こうに広がる畑地がみえかくれするなど、自然環境と一体化した町並みを形成していることが分かる。



写真2-117 鞍馬の町並みと自然

街道に軒を連ねる歴史的な民家では、江戸初期に成立した「雍州府志」にも記載が見られる、鞍馬の特産品の「木の芽煮」などが販売され、独特の香りが漂い、鞍馬寺の門前町としての風情をかもし出している。

また街道沿いには、由岐神社のお旅所がある。祭礼のときに神輿が渡御するところであるが、日常は小広場として子供の遊び場にも使われており、住民にとってなじみ深いところである。また、これら以外にも祠や地蔵堂が、町並みにとけこむようにしていくつか点在している。

鞍馬川は、生活用水や非常の際の防火用水などに利用され、川面におりる石



図2-68 鞍馬街道

その町並みを構成する民家は、町家風民家が中心である。街道の両側に建ち並び、連続性のある町並みを生み出しており、中でも瀧澤家住宅は、伝統的様式をよく残しており、国の重要文化財に指定されている。

段，川沿いに開かれた畑地や川原沿いのみち，せせらぎの音までもが複合しあい，優れた自然景観を生み出している。

鞍馬のまちの背景をなす鞍馬山は，全山木々のおい繁る緑深い山であり，鞍馬寺の神聖な寺領でもあり，また住民が山林業を営む場ともなっている。

b 鞍馬の祭

こうした長い歴史を有し，門前町として発展してきた鞍馬の町並みのなかで，地域の人々の手によって，伝統的な祭りが受け継がれている。

時代祭と同じ10月22日の夜に行われる「鞍馬の火祭」（市登録文化財（無形民俗文化財））は，「京都の祭礼」の項でも示している通り，由岐神社の祭礼で，鞍馬のまちの各所に焚かれたかがり火の中を氏子の若者たちが大きな松明を担いで練り歩く勇壮な祭で，京都の三大奇祭の一つと言われている。

また，長さ4mもの青竹を大蛇に見立て切り落とす速さでその年の豊凶が占われる鞍馬寺の竹伐り会（市登録無形民俗文化財）（「都名所図会」で紹介されている）や初寅など，鞍馬の祭は毎年多くの人々で賑わい，街道筋の歴史的な町並みと一体となって，独特の風情を醸し出している。

(4) 貴船

鞍馬街道から芹生峠へ至る道へ入ると，そこは水の神を祀る貴船神社で知られる貴船の地である。

貴船神社は5世紀頃の創建と伝えられる古社で，現社殿は文久年間（1861～1864）の造営である。古くから水神として信仰され，今でも農林漁業者や醸造業者らの信仰が厚い。

6月には貴船神社の例祭である貴船祭が行われ，神輿が貴船町内を練る。その日の午後には，奥宮にある船形石で，地元の子供たちが忌み串を手に「おせんどんどん」と唱えながら船形石をめぐる千度詣が行われ，貴船の自然と一体となって，歴史的な風情を醸し出している。貴船祭は古くは4月と11月に行われていた様で，延宝4年（1676）に成立した「日次紀事」の中にも記されている。

また貴船は，京の避暑地として栄えた地域であり，貴船神社付近の参道には料理料亭が軒を並べ，貴船川の川床は，夏の納涼の風物詩となっている。

貴船の川床の歴史は大正時代頃，京都と丹波を行き来する人や貴船神社への参拝客たちを，川に床机を置いてお茶や食べ物などを出し



写真2-118 貴船の納涼床

てもてなしたことが始まりといわれている。戦後になって今のような川床になり、料理旅館が増え始めた。

貴船川の川面いっばいに低く床を張る。足が浸かるほど水面に近いので、清流の冷気と近くに聞こえる瀧の音を楽しみながら料理を味わうことができる。

川床は、5月から9月末まで設けられ、真夏は市内より気温が5℃以上低い。ここで楽しむ食事は、川の幸と山の幸を中心にした料理が中心であり、さわやかな川のせせらぎが情緒を醸し出し、訪れる人々は市中を離れ、納涼の風情を楽しんでいる。

(ウ) 鞍馬街道の歴史的風致

このように鞍馬街道では、街道沿いなどに形成される町において、門前町としての営みや、避暑地としての営み、またその町の中心となる寺社で行われる祭礼などの営みが、寺社等の歴史的建造物や町並み、そして背後に広がる山々や川などの自然と一体となって風情のある環境を醸し出し、京と密接に関わってきた街道の門前町としての往時の姿を伝統ある祭礼などを通して感じることができる。

イ 若狭街道

若狭街道は、京都の北部山間を経て若狭に抜ける道である。平安京以来の古道で、若狭で獲れた魚介類を京都に運ぶための重要な街道であったことから魚街道、鯖街道と呼ばれ、往来も多かった。また、この街道沿いの大原などは自然風景豊かな山里として、貴人の隠棲の地としても知られている。

(7) 大原

a 貴人の隠棲地

大原は、静かな山里であり四季の移ろい豊かな自然環境を持ち、かつては貴人の別荘や隠棲地ともなっていた。街道から西に入り進んでいくと姿を現す寂光院は、源平合戦の後、建礼門院徳子とその子安徳天皇の菩提を弔い余生を送った地として知られる。また、街道の東に位置する三千院は、魚山声明を伝えることで知られる。伝教大師最澄が比叡山の東塔南谷に開いた草庵に始まり、12世紀より宮門跡となり、梶井門跡とも称した。



図2-69 若狭街道

その時、天台宗の声明の道場であった大原魚山（来迎院，勝林院，往生極楽院など）を管理することになり，大原に政所を設けたのが現在の三千院の前身である。声明とは，お経に節をつけて詠むもので，宗教音楽であるともいわれる。往生極楽院阿弥陀堂（重要文化財）はこけら葺の仏堂で，久安4年（1148）の造営と見られている。この界限は，現在は農業と観光を中心とした地区であるが，隠棲の里として特有の雰囲気醸し出す四季折々の眺めは市中とは違った趣がある。

この三千院では，2月の初午大根炊きでは地元大原で栽培された大根が使われ，多くの参拝者で賑わいをみせ，また，12月には大原の地域で托鉢寒行が行われ，師走を感じさせるなど，地域と結びついた様々な年中行事が行われる。

b 山里としての営み

高野川の川上に開けた大原の里は，かつて貴人が好んで隠棲した地であったことから分かるように，四季の移ろい豊かな自然風景を形成している。また，伝統的な様式の農家建築などが今もなお残り，里山の風情を一層引き立てている。この農家建築は北山における一般的なものであり，中規模の農家建築が建てられるのは近世半ば以降と考えられている。

夏には山に囲まれた青い稲田の中に赤紫の紫蘇畑が入り混じって織りなす景色が美しい。この赤紫蘇は京漬物のしば漬けの材料にするもので，これ程たくさんに作る紫蘇畑は珍しい。

このしば漬けは，古くからの大原の特産で，その昔，寂光院に住まわれた建礼門院に土地の人が献上したところ喜ばれて，しば漬けの名を賜ったのがはじまりだという。その歴史は古いようだが，元は自家用として漬けられていたようで，後に特産となり，明治後期に発行された「京都府愛宕郡村誌」には，大原村の名産として紹介されている。

大原でこの赤紫蘇を伝統的に作るのは気候条件が適しているからである。一般に，紫蘇は夏の始めには赤紫蘇の美しい色をしているが，梅雨が明けて土用に入り，気温が30度を超すようになると色が褪せてくる。ところが大原では夏でもそれ程気温が上がらないことから，夏の間，美しい色を保ち続ける。

また，紫蘇の葉は，しなびやすいものであるため，地元で作る方がよいということも産地が大原から移動しない理由である。



写真2-119 大原の町並み



写真2-120 しそ畑

街道から江文峠への道の傍らに、大原八ヶ町の総氏神である江文神社がある。創建は不明であるが、井原西鶴の作品に当社の習俗が描かれており、また江戸時代中期ごろに成立した「山州名跡誌」にその名があがっており、例祭や神輿の存在も示されている。現在でも毎年5月に江文祭が行われ、神輿が担がれる。また、ここでは、毎年9月、15、6歳の青年によって踊る大原八朔踊（市登録無形民俗文化財）が行われる。江戸時代中期に都を中心に流行した踊口説で、夜7時頃、人びとは町名を書いた高張提灯^{たかはりちょうちん}を掲げ、出発の音頭を歌いながら江文神社へと向かう。江文神社の石段下に、それぞれの町の提灯を掲げて集結し、一同が伊勢音頭を歌いながら、石段を上がる。境内へは「寄せ歌」であるシヨンガイナを歌いながら入場する。続いて各町からの音頭取りが四方に斎竹^{いみだけ}を立て、注連縄を張った屋台に上り、輪になって道念踊りを踊る。

また、上野町の村堂である観音堂では、市の登録無形民俗文化財である「おこない・お弓」が行われる。観音堂の創立及び「おこない・お弓」の起源は定かではないが、祭礼の母体となっている座への加入については、近世中期の資料に記載が見られる。さらに、5月には、大原観光保勝会によって大原女まつり^{おほらめ}が行われる。大原女とは、大原の里に住み、薪などを頭に載せて京に売りに出ていた女性である。30年ほど前から始められた大原女まつりは、中世から現代までの大原女装束をまとった大原女が、勝林院から寂光院までをパレードする時代行列で、大原女の暮らしに息づく伝統衣装を今に伝える風俗保存活動である。

このように、大原では寺社等の祭礼のほか、紫蘇の栽培など歴史に根ざした営みがなされており、寺社や農家建築とともに里山の風情を醸し出している。

(4) 八瀬

街道筋を大原から京都方面に向かうと、八瀬の集落に入る。八瀬は、比叡山のふもとに位置する山間の集落で、春の桜、秋の紅葉が有名で、風光明媚な名所である。早くは比叡山延暦寺山門のため、のちには宮中の御大葬のときの駕輿丁を奉仕する村であり、その人々は今も八瀬童子の名で呼ばれている。

八瀬赦免地踊（市登録無形民俗文化財）は、毎年10月、八瀬天満宮の摂社である秋元神社で行われる祭である。

別名燈籠踊りとも呼ばれ、もとは、室町時代初期に始まった踊りで、江戸中期に祠を建て、踊りを奉納するようになったと伝えられており、明治後期に発行された「京都府愛宕郡村誌」にその記録がある。祭に使われる切子燈籠は、動物などの図柄を透かし彫りにして作られたもので、現在4つの花宿から



写真2-121 八瀬の町並み

各2基、合わせて8基出される。当日はこの切子燈籠を頭に載せた女装の男性らが行列を組み秋元神社に向かう。踊りと踊りの間ににわかきょうげん俄狂言をはさむ点や、切子燈籠に室町時代の風流踊りの面影を残している。

(ウ) 若狭街道の歴史的風致

このように若狭街道では、街道に見られる集落などにおいて祭礼行事や伝統的な農業などが行われており、これらが寺社等の歴史的な建造物や農家などの建造物群、川や山などの自然風景が一体となって、穏やかな街道風景を形成している。

そして、そこを訪れる人々に、京と密接に関わってきた街道の門前町としての往時の姿を地元で伝わる風俗や祭礼などを通して、感じさせている。

ウ 伏見街道

伏見街道は、東山区五条を南下して、伏見に通じる街道である。豊臣秀吉が伏見城を築城した文禄年間（1592～1595）頃、京と伏見を直結する道として開かれたといわれている。沿道には東福寺や伏見稲荷大社、藤森神社など、著名な社寺や景勝地が多く、参詣の道として江戸時代から旅人の往来が絶えなかった。

中でもその代表格なのが、伏見稲荷大社である。伏見稲荷大社は、渡来系の秦氏にゆかりの深い神社で、和銅年間（708～715）に創建された。この伏見稲荷大社は、全国各地に祀られている稲荷神社の総本社であり、毎年初詣には、全国から沢山の人が参拝する。本殿（重要文化財）、拝殿、権殿のほか摂末社も多い。山中の神蹟を巡拝するお山巡りの参道の数千本の鳥居は偉観である。

稲荷祭は、平安朝からの伝統で、同社最大の祭典である。5基の神輿が、南区西九条のお旅所に渡御し、還幸祭に京都駅周辺から松原通まで拡がる氏子区域を巡幸して帰社する。この神輿は全国でも優美華麗なものとして知られる。江戸時代初期に書かれた「隔莫記」の中では、稲荷祭が華美であるという記載がある。

伏見稲荷大社前の参道は古くから伏見稲荷大社への参詣人のための土産物屋や料理屋などが軒を連ねて門前町を形成していた。寛政11年(1799)発行の「都林泉名勝図会」には、^{はつうま}初午のときの門前が描かれ、茶店等の様子やにぎわいの様子が描かれている。現在でも、神具類の店や伏見人形の店を始め、煙とともに醤油タレの焦げた香りが参道に漂う雀の焼き鳥、狐煎餅など、門前町として発展した伝統的な産業が受け継がれている。

伏見人形は、色をつけた素焼きの人形で、16世紀頃から売られており、伏見稲荷大社参詣の土産物として全国に有名になった。安永9年(1780)に発行された「都名所図会」では、門前の店で伏見人形を販売している様子が描かれている。伏見人形は、土人形の起源とされ、全国各地でも模倣されて同様の人形が縁起物として作られ、人気を博している。



写真2-122 伏見稲荷 参道



図2-70 伏見街道

藤森神社(重要文化財・市指定有形文化財)は、平安期以前、神功皇后が軍旗や武具をこの地に埋め神まつりしたのが始まりと伝えられ、菖蒲の節句発祥の神社としても知られている。5月の藤森祭では、朝から神輿3基が氏子内を巡行し、武者行列が練る。端午の節句に武者人形を飾る風習はこの行事に由来する。この日、境内では駄馬神事(市登録無形民俗文化財)があり、馬上妙技が披露される。

東福寺は、臨済宗東福寺派の本山である。三門(国宝)をはじめ、浴室、東司禅堂(選仏場)、鐘楼(いずれも重要文化財)など貴重な建築が残る。龍吟庵方丈(国宝)は現存最古の方丈建築であり、方丈の周囲に枯山水の庭園をめぐらせる。境内の通天橋は、紅葉の名所であり、寛政11年(1799)に発行された「都林泉名勝図会」にもその様子が描かれている。

伏見街道には他にも、泉涌寺や石峰寺などの寺社や名所があり、街道はそれらの名所を繋ぐ形となっている。それぞれの寺社において様々な祭礼などが行われており、その街道沿い付近では、みやげ物の販売などの営みが行われており、街道沿いの寺社などの歴史的建造物や町並みと一体となって、歴史的な街道筋の風情を形成し、行き交う人々に、京と伏見を繋ぎ多くの人々で賑わっていた往時の街道の活気を今もなお感じさせている。

エ 山陰街道

山陰街道は、京と山陰地方を結ぶ街道で、7世紀の駅制による行政区画「山陰道」に由来し、その主要道が平安京に接続されたものが原型となっており、古くから物流などを支える重要な陸路である。また、江戸時代に入ると山陰地方の諸大名の参勤交替の行き来が見られた。



図2-71 山陰街道

榎原は、桂川西岸の山陰街道に沿う集落で、かつては山陰街道の宿場町であった。本陣が残り、今もなお街道沿いの家々が当時の面影を残している。建築形式としては町家に近いもので、近世中期くらいからこのような形式の農家住宅ができてきたと考えられる。

榎原の家々は街道よりも2～3m程奥まったところに建てられており、天井の低い2階を持つむしこ造で、大屋根の軒の出を深くして1階建のような外観となっている。街道と建物の空間は、物置、旅行者の休息場所として利用され、街道には障害物を置かないようにされ、幹線街道として支障のない開放空間にされていたと考えられ、まちなかの道とは異なる空間である。その中で、玉村家住宅（市指定有形文化財）は、市内



写真2-123 榎原の町並み

災除けの護符と^{しきみ}櫛の枝をうけ、これを家に持ち帰って神棚やおくどさんに祀る。

(イ) 嵯峨鳥居本

愛宕街道沿いに位置する嵯峨鳥居本は、室町末期頃、農林業や漁業を主体とした集落として開かれた。その後、江戸時代中期になると、愛宕詣の門前町としての性格も加わり、江戸時代末期から明治・大正にかけて、愛宕街道沿いには、農家、町家のほかに茶店なども建ち並ぶようになった。

地区の中ほどにある化野念仏寺を境として上地区と下地区に分けると、愛宕神社の一の鳥居に近い上地区は主としてかや葺の農家風、下地区は町家風の建物が周囲の美しい自然を背景に建ち並び、すぐれた歴史的環境を形成している。

この地区では、毎年8月に町内の地藏盆と化野念仏寺の千灯供養が行われる。この千灯供養は、明治38年（1905）に始まり、当初は24日の地藏盆に行ったが、近年は8月23日、24日の2日間行われ、京都の夏の風物詩となっている。また、これらに加えて、化野念仏寺付近で愛宕古道街道灯しが同じ日に行われる。愛宕神社一の鳥居から祇王寺までの街道筋に、およそ500を数える提灯が灯され幻想的な世界が演出される。



写真2-124 嵯峨鳥居本の町並み

(ウ) 愛宕街道に見る歴史的風致

このように、愛宕街道においては、通夜祭をはじめとする愛宕詣での営みや、その街道沿いにおいて行われる様々な祭礼が、寺社等の歴史的建造物や街道沿いの町並み、また信仰の山の風景と一体となって、厳かでありながらも人々の信仰とともに親しまれてきた参詣道としての街道の風情を、今もなお感じることができる。

カ 鳥羽街道

鳥羽街道は、淀から始まり、鴨川、西高瀬川の東に沿って鳥羽離宮跡のそばにある小枝橋を北上し、平安京の表玄関であったかつての羅城門まで続く道である。平安京建設と並行して作られた「鳥羽作り道」が鳥羽街道として受け継がれた。そして、平安京が建設された時、都の南方に鎮まり国の守護とされたのが、城南宮であ

る。現在では、方除け大祭や曲水の宴などの年中行事が行われる。

鳥羽街道は陸路であるが、納所や横大路あたりで西国からの水路と結ばれていことから、このあたりは運送業者や宿屋が軒を並べ大いに賑わいをみせていた。また、この街道沿いには上鳥羽村や下鳥羽村という集落なども形成され、現在でもこれらの界限には歴史的建造物である農家や町家などが残っており、当時の面影を残している。これらの農家は町続きの街道沿いの農家住宅であり、建築形式としては町家に近いもので、近世中期くらいからこのような形式の農家住宅が形成されてきたと考えられる。

街道の両側の民家は、少し高い石段の上に建てられている。上鳥羽から下鳥羽にかけて、鴨川、桂川、西高瀬川の合流地点で、大雨となると川が溢れたからである。また、古くは京の伝統野菜である九条葱や壬生菜などの野菜が多く採れたが、それは水つきによって土地が肥えていたためだと言われている。

また、平安京の南部に当たる地域は、水運業の発展や豊かな質の高い伏流水に恵まれていたこともあり、かつての下鳥羽村の集落が形成されていた地の街道沿いでは、創業300年余りの最も古い歴史を持つ蔵元の一つである増田徳兵衛商店などが、酒蔵や主屋の軒を並べている。ここでは、現在でも酒造が行われており、軒下に吊るされた杉玉が酒造りの家としての風情を醸し出している。

また、ここは、かつては京から大阪や西国の地へ赴く「お公卿さん」達の中宿もつとめた由緒ある旧家でもある。

このように、鳥羽街道では、街道沿いの民家において古くから行われ、今なお続けられる営みが、歴史的な町並みと一体となって、行き交う人々に、趣きある往時の街道の姿を今に感じさせている。



図2-73 鳥羽街道



写真2-125 鳥羽街道と増田徳兵衛商店

キ 京街道と京の七口に見る歴史的風致

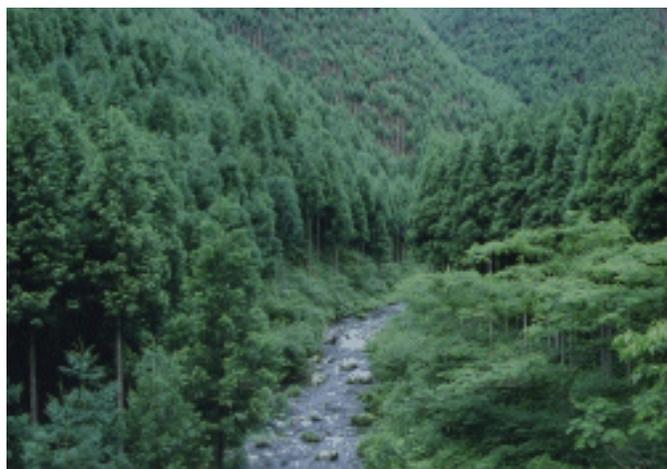
このように、京都における街道沿いの地域は、寺社などの歴史的建造物を中心に、祭礼行事をはじめとして、地域特有の伝統的な人々の活動が現在まで受け継がれ、町並みや、山、川といった自然環境と一体となって、地域特有の歴史的風情を醸し出している。

それぞれの街道は京から全国に通じる道であったことから、これらの地域における人々の営みはこれまでに述べてきたように京の文化や京の人々の生活とも繋がりがあり、そこで営まれる人々の営みは京とともに歩んできた往時の姿を今に伝えている。

(3) 山や野にみる歴史的風致

三方を山々に囲まれている京都は、これらの山々やその裾野、そして平野部などにおける営みと関わりながら、発展を遂げてきた。

この項では、京都の山や野で営まれる生業を具体事例として、これらの山や野における歴史的風致を示していく。



ア 京都の三方の山々

写真2-126 山の風景

京都は三方の山々に川筋のある特長的な風土を有しており、このような風土が生み出す盆地景は、先人達が原風景として捉えてきた歴史的風致の基盤とも言うべきものである。また、この三山は、古くから信仰の山でもあり、自然を大切にする精神を培ってきた。

北部の山地は北山と呼ばれ、市域の最高峰である皆子山、峰床山、三国岳といっ

た900m台の頂とその前面に標高400から600mの山々が連なっている。

東部の東山は、比良山系の南に続く比叡山を最高峰として始まり、稲荷山で終わる「東山三十六峰」が横たわるが、大文字山から音羽山・醍醐山へ続く尾根も東山山地を形づくっている。

西部の西山は、愛宕山から標高400から600mの山並みが保津川を挟んでポンポン山に続いている。

また、中山間地域は、山林、農地、民家群がセットになった美しい農山村集落の風景がみられるのも京都の特長である。



図2-74 京都の山

イ 具体事例

(7) 生業の野：京野菜

京都は海から遠く、海産物の運搬は難しい。このため、当時、世界でも有数の大都市であった平安京では、食生活を保つために野菜づくりが重要となり、洛外の地が野菜の生産地として開拓されてきた。また京都には、朝廷や寺院への献上品として、全国各地から優れた野菜の種や生産技術が集まり、品種改良も行われてきた。さらに、精進料理の発達なども手伝い、全国から集まったそれらの野菜が京都で育成され、根付いた。

それに加え京都には、四季の移り変わりが明瞭であること、昼夜の温度差が大きいこと、地下水が豊富で豊かな土壌であったことなどの好条件がそろっており、このような環境が今日の京野菜を育てていった。1987（昭和62）年に京都府が34種を「京の伝統野菜」として選定したのをはじめに、平成21年現在では、40種にまでその数を増やしている。

昨今、いつでも、どこでも画一化された野菜が出回っており、野菜の季節感がなくなっている中、京野菜はその季節でしか味わえない昔タイプの野菜と言え、季節なくして京野菜を語ることは不可能である。春は、朝掘りの京たけのこや花菜。夏には、賀茂なす、鹿ヶ谷かぼちゃなどの果菜類。秋には丹波松茸。冬には九条ねぎ、京せり、千枚漬の原料となる聖護院かぶなど、その季節限定野菜が登場する。また、京料理や京漬物においても季節の野菜で内容が変わり、旬が味わえる。京野菜は、京都の食文化を支え、京野菜を食することで、季節を愛で感じることができ、京都の人々にとって欠かせない存在である。

京野菜の中の1つで、九条ねぎがある。九条ねぎの栽培の歴史は古く、1200年以上前に京都に導入され、その後、現在の京都市南区九条付近で品質のよいねぎが栽培されたことから、九条ねぎの名がついたとされている。承和5年（838）の「続日本後紀」などに九条ねぎと想定できる記録があるほか、近世になると江戸初期に成立した「雍州府志」に東寺の付近よりやや東南部にあたる東・西九条付近のねぎの記載がある。九条ねぎの伝統的栽培は、大変手間暇のかかる仕事で、秋に種を蒔き、3月頃まで苗床で育て、仮植えをし、7月下旬頃から1ヶ月ほど掘り上げて稲を干すように、約1ヶ月間天日で乾燥させる。収穫までには1年以上の月日がかかる。現在でも鳥羽街道周辺などで作られており、街道沿いには町家や農家が建ち並び風情ある歴史的風致を形成しているほか、九条周辺などでも作られている。

春の京野菜を代表する京たけのこは、江戸時代に道元禅師が中国から持ち帰り長岡京市奥海印寺に植えたと言えられており、明治時代に記された「京都府園芸要鑑」によると、現在栽培が盛んな西山地区には、寛政年間（1789～1800）に導入されたとされている。この地域では、高度な栽培技術と1年を通じて

の徹底した竹林管理がされている。秋から初冬にかけては竹藪に藁を敷き、肥料を施しては客土をかぶせてゆく。手間に手間を掛けた土はやわらかく、足が埋もれてしまうほどである。たけのこを掘る道具は、つるはしの刀の部分を中心に長くしたような独特のもので、たけのこが土にまだ顔を見せない状態で掘り当てる。この地域は、山並みを背景にしたすそ野と田園が広がる集落で形成されており、伝統的な様式を残す農家をはじめとする町並みが形成されている。

夏の京野菜を代表する賀茂なすは、洛北の上賀茂周辺で作られている。起源は明らかではないが、江戸初期に成立した「雍州府志」の「雑菜部」の「なす」の項にある丸くて大きいなすが、賀茂なすと考えられている。4月上旬に植えつけ、7月上旬から8月下旬に収穫される。

また、この地域では賀茂なすや水稲の後に、秋の終わりごろ収穫されるすぐき菜の生産も行われている。漬物のすぐきは、柴漬、千枚漬と並んで京都の三大漬物の1つと言われている。起源は定かではないが、江戸時代初期の「日次紀事」には記載があり約300年前には既に漬物として評価を得ていたことが分かる。もとは社家のみで栽培されていたもので、現在でも地域的に限られた状況で栽培され、栽培についての文献は無く地元住民の口伝にのみ伝えられている。収穫されたすぐき菜は漬物に加工される。根の部分の皮を剥き、塩で予備漬け、本漬けた後にむろに入れられ醗酵させる「むろ作業」を行う。これらの作業の加減などは長年の経験による秘伝となっており、すぐき菜の生産地が限定されている理由の一つとなっている。この地域は、上賀茂神社に使える神官の住居（社家）と農家が混在し、発展した地域で、今も落ち着いたこれらの歴史的建造物群が雰囲気漂わせている。



図2-75 すぐき菜の代表的な生産地（上賀茂）

秋冬の京野菜を代表する聖護院だいこん・かぶは、10・11月からが収穫時期である。聖護院だいこんは、文政年間（1818～1830）に現在の左京区聖護院に住む農家が黒谷の金戒光明寺に奉納されただいこんを譲り受け栽培したのがはじまりとされる。現在は、京都府下や他府県での生産が増えているが、市

内でも生産されている。聖護院かぶは、千枚漬の原料となり、御所の料理人であった大黒屋藤三郎が慶応元年（1865）に考案したと言われている。千枚漬は、京都の冬を代表する漬物である。

これら京野菜の生産が営まれている周辺の農家住宅は町続きの街道沿いなど洛中に近く、建築形式としては町家に近いもので、近世中期くらいからこのような形式の農家住宅が形成されてきたと考えられる。

農家が収穫した京野菜は、流通の進歩により全国各地に出荷されているが、京都市内では、かつて大八車に載せて、直接各家庭に売りに回っていた「振り売り」が、軽トラックに形を変えて続けられている。また、各季節の京野菜の収穫期には、農家の軒下による直



写真2-127 振り売り

売が行われており、市民のみならず、訪れる人々の食卓を彩り、味覚はもとより、本来の日本の季節感を楽しませている。

このように、京野菜の生産や販売などの営みは、伝統を守りながら今もなお受け継がれ、それらの営みは、昔から変わらない人々の京野菜に対する姿勢を感じさせる。そして、周辺の農家住宅等の歴史的建造物、背後の山々の風景が、農業が行われている田畑を包み込んでおり、京野菜の歴史を感じさせる。

さらに、京野菜を通じて京都の食文化を支える活動は、京都市内全体における人々との交流を通して、趣のある風情を醸し出している。

季節別「京の伝統野菜」一覧

春の野菜	花菜 (伝統野菜に準じるもの)	1月上旬～ 4月上旬	冬の野菜	すぐき菜	11月中旬
	佐波賀だいこん	2月～5月		えびいも	11月上旬～ 12月中旬
	京たけのこ	3月下旬～ 5月上旬		京せり	10月下旬～ 4月上旬
	畑菜	3月下旬～5 月上旬		舞鶴かぶ	11月上旬～ 12月
	時無だいこん	4月		堀川ごぼう	11月上旬～ 12月中旬
	京うど	5月		辛味だいこん	11月上旬～ 12月中旬
	桂うり	5月～6月		青味だいこん	11月～ 1月下旬
夏の野菜	伏見とうがらし	4月中旬～ 10月下旬	桃山だいこん	11月中旬～ 1月下旬	
	万願寺とうがらし (伝統野菜に準じるもの)	5月中旬～ 10月上旬	松ヶ崎浮菜かぶ	11月下旬～ 2月下旬	
	じゅんさい	5月～9月	くわい	12月	
	もぎなす	5月～7月	茎だいこん	12月中旬	
	賀茂なす	5月中旬～ 9月上旬	大内かぶ	12月中旬～ 3月上旬	
	山科なす	6月中旬～ 9月下旬	鶯菜	1月～2月	
	鷹ヶ峰とうがらし (伝統野菜に準じるもの)	6月～9月	佐波賀かぶ	2月～3月	
秋の野菜	田中とうがらし	6月上旬～ 10月下旬	その他	みず菜	通年
	鹿ヶ谷かぼちゃ	7月上旬～ 8月中旬		壬生菜	通年
	柊野ささげ	7月上旬～ 9月中旬		九条ねぎ	通年
冬の野菜	京みょうが	9月	聖護院きゅうり	保存	
	聖護院だいこん	10月下旬～ 2月下旬	郡大根	現存しないもの	
	聖護院かぶ	11月～ 2月	東寺かぶ	現存しないもの	
<p>「京の伝統野菜」の定義</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 明治以前の導入の歴史を有する。 2. 京都市域のみならず府内全域を対象とする。 3. たけのこを含む。 4. キノコ類, シダ類 (ぜんまい, わらび他) を除く。 5. 栽培又は保存されているもの及び現存しない品目を含む。 					

(イ) 生業の山

a 北山の林業

京都北山地域は、京都市街地の北西部に広がり、「北山杉」として全国に知られた磨丸太生産を特徴とする日本でも有数の林業地帯である。谷沿いの斜面はいずれも急峻で、水田や畑地として利用できる谷底の平地は非常に狭隘であったことから、集約的な林業が営まれてきた。1年を通して気温が低く、ほどよく湿り気が多い空気が、北山杉を育てるのにこの上ない条件を作り出している。

なかでも中川・杉坂・真弓・大森といった集落周辺では、杉材の生産が盛んに行われた。

北山杉の林業地域は、京都の「近郊山村」というべき位置に立地し、古くから京都の経済と密接に結びつく形で生業が営まれてきた。北山杉の歴史は古く、約600年も前の応永年間(1394～1427)までさかのぼる。近世以降、これらの地域は茶室建築や数寄屋造り建築の需要の高まりと併せて、床柱や垂木などの建築用木材の供給地となった。天明7年(1787)に発行された「拾遺都名所図会」には、北山杉の川流しの様子が描かれている。

北山杉の木材は、磨き丸太という、樹皮をはぎとった丸太を砂できれいに磨きあげた無垢の状態で用いられることに特徴がある。加工によって形状を修正することができないため、育林時に一本一本の杉木を用途に応じてまっすぐに、太すぎず、細すぎず、そして美しく節のないよう慎重に育てる必要がある。このような手間暇をかける生業が代々に渡って受け継がれ、そして今も行われているのである。



写真2-128 北山杉



写真2-129 北山杉の磨き

b 林業を支える建造物群

この辺りでは、北山杉の斜面地に囲まれた狭隘な地に集落が形成されている。

このため、作業場を敷地内の前庭など取る必要があり、広い前庭と対照的に屋内の土間は非常に狭い。このような、独特の配置と内部構造を持つ歴史的建造物である茅葺民家などが伝統的集落の佇まいを今に伝えている。

また、川に沿って長く建ち並ぶ乾燥小屋の眺めは壮観である。多くは木造2階建てであるが、建物全体を包み込む大きな屋根の連なりは見ごたえがある。北山杉丸太の乾燥小屋は、全国的にも類例を見ず、その存在はきわめて珍しい。



写真2-130 乾燥小屋の眺め



写真2-131 茅葺民家

このように、現在も続けられている林業によって形成された、まっすぐ上に伸びる北山杉の美しい人工林風景が、磨き丸太の乾燥小屋などの生業に関わる施設や民家とともにこの地域の集落特有の町並みが形成しており、京都の伝統産業の技が今もなお、綿々と受け継がれていることを感じさせている。